
まぐろ剣士 -Rein:carnation-

ゆり†

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まぐる剣士 - Rein: carnation -

【Nコード】

N5708V

【作者名】

ゆり+

【あらすじ】

劣等生の一撃の続きです

プロローグ

これは去年の話

夏、私は人を殺してしまいました

まだ幼い子どもを、兄の目の前で車で撥ねてしまったんです

気づいたときには、それはそれはむごい死にざまを子どもに与えてしまいました

少年は泣き崩れ、突如として成り果て折れ曲がった死体の脇で、必死に散った弟の血をかき集めていました

ぼてりと転がった赤黒い肉塊を痛く痛く抱きしめて、泣いていました

タイヤの摩れる音よりもずっと、それは耳にいつまでも響いていました

なぜあのときブレーキを踏まなかったのか
なぜ逃げたのか

なぜ、一年もの歳月、こんな事になってしまったのか

.....

今を語る前に、そのお話を、こんな人殺しに成りえた私の過去を語ります

.....

父親はいなかった

小学生のころ、気がつくと私の家庭は離婚していた

聖蹟桜ヶ丘の小さなアパートに住んでいた

母親は優しく、周りにも愛想良く、そして弱音も吐かず影では強い人だった

身体は細く、肌は白く、長い髪は見るからにさらさらだった
大きくはない声で、たいへん嬉しそうに小さな私の隣に立つ姿をよく覚えている

穏やかな物言いに幸せそうな屈託のない笑顔をいつも私に向けていた
しかし当時の私にはそれはコンプレックスの固まりでしかなかった

自分自身が不安で弱くて、家庭にコンプレックスを抱いていた

けれどもそれと真逆の母と歩くと、そのときほど恥ずかしくみすばらしいと感じるときはなかった

母はずっと、女手一つで私を育ててくれました
裕福ではなかったに違いない、しかし当時はそれを実感することは
少なかった

何不自由なく平穏な生活を小学生の私に、人生を削って全てを注ぎ、
尽くしてくれました

毎朝早朝出ていく母が日常の一つの習慣のように、当たり前と感じ
ていた

週二の休み以外、母は自分が眠ったずっと後に、日付も変わったず
っと後に、帰ってくるのだった

そして、ご飯の支度と歯磨きだけをしてまた出ていくのだった

私に見つからないよう、仕事終わりのスーパーで買った惣菜は、全
て半額シールを剥がして置いていきました

休みの日は休みではなく家事を一日かけて、自転車一つでやっての
けました

そんな環境とは裏腹に、私は高校生になると、いわゆる不良になった
他人が見て不良とわかる不良ではなく

タバコも酒も暴力もバイクもない
シャツを出す程度の、誰とも関わらない不良だった

とにかく友達がいなかった

朝や昼休み、体育の授業や行事には決まって出なかった、参加しな
かった

そういう、不良だった

誰もが自然に身につく愛想笑いも上達しなかった、色んな事が劣って

たまに学力で明確な馬鹿な事が皆に見つかり、休み時間にスラックスのポケットにテストの用紙を折って隠して教室から消えた

カバンの中を漁られることがあったから

いじめではなかったが、嫌われてもいなかったが、孤独だった

私はそういうときは決まって屋上に逃げた

扉からは入れないが、私だけが入る方法を知っていた

最上階に普段使われていない教室があった

そこには非常階段に通じる扉があり、開けると非常階段から屋上に行くことが出来た

一応、赤錆だらけの安い鍵のついた薄いフェンスの扉はあったが、蹴ってみると鍵は壊れてぼろぼろと落ちた

私は屋上の空気が好きだった

こんなに生徒で溢れている空間の頂上を独り占めできた事に
すし詰め箱とは違う、空に一番近くて開放的な空間にだ

両手を広げて、目を閉じて、両耳を開けた

この日の感動は忘れない

教室から屋上へ行く日常は続き、そして私の人生に転機が訪れる

ある夏休みの夜のこと

テレビでスタンドバイミーという映画を見た

すると私はどうしても真夏の誰もいない屋上に駆け上がりたくなった

制服を着て、携帯をしまつて、自転車をガラガラ鳴らして学校に一人向かった

行き着いた、飾りのような薄いフェンスの扉を開けると

先客がいた、それも三人も

それが私達の出会いだった

どこにでもいそうな冴えない顔の 五十嵐 日向

茶色の髪に前髪をヘアピンで止めた背の高い 羽鳥 康介

真面目そうな面に黒ぶち眼鏡にさらさらの髪の 中島 京

その中央には天体望遠鏡が空を向いていた

‘天文部’ 別名、青春部だと言われた

どいつもこいつもこの学校の省られ者だった
似た者同士だった

帰ろうとしたが、空気を悟られてしまった

屋上に来る人間は、みな理由は同じ、決まって同じ孤独の住人だった

銀河のほとりで、私は久しぶりにばか笑いできた気がした

私は、友達が出来た

その夏、ハケ岳にある日向のいとこのおじさんの別荘に行ったり
男四人で調布の花火大会にも行ったり

天体望遠鏡を担いで色んな場所に行った
青春をおうかした

そんな風にして、高校三年生の夏になった

受験と進路を控えた周りなど気にせず、私は最後の夏を過ごしていた
ハケ岳の別荘に今年も行く予定を控え、それと合わせて皆でお金を
出しあつて新しい天体望遠鏡を買おうとしていたときだった

私は、初めて母と喧嘩をした
久しぶりに母と話した

気がつくと、私は母の身長をずっと越えていた
母は、数本白髪を蓄えていた

リビングの小さなテーブルに座り、母は面と向かつて進路について
聞いた

私は頭が良くなり、かといって夢や目標があるわけでもなかった
ただ部活に夢中に、だらだらと学校生活を過ごしてしまっていた

母は何も悪いことは言っていなかった

まっとうで正しい道を選んでほしいと心の底から考えてくれていたけれどもそんなことは知らず、目の前に輝く夜空だけを見続けた反抗期の、全く思いのままに生きる私は

かつとなつて、決して親に言つてはいけないその言葉を、容赦なく真正面から怒鳴ってしまった

「誰がこんな家に好きで生まれたかよッ！！」

「お前みてえな親いらねえんだよッ！ 早く死んじまえよッ！」

母の心を踏みにじってしまった

育ててきた息子に言われたその言葉は、死ぬほどきつかったに違いない

しかし母は表情も変えず、知らぬ間に、そんな私の為にまた薄暗い街へと出ていくのだった

ろくでもない私はそんなことをお構い無しに、母の大切に貯めていた生活費の入った封筒から天体望遠鏡のお金をくすねた

何も言わず、母と絶交する覚悟で、怒られるのを覚悟で

しかし勝手気ままに別荘から帰ってくるとその夜も変わらず、半額シールの剥がされた惣菜と白米が炊かれていた

そんな母の重みに気がつかず、私は何度も気持ちをお粗末にし続け

てきた

後に知ったが、母はそのときずっと働いていた仕事をクビになって非常に大変な状況だったらしい
働き口を必死になって探していたのだった

何も知らず、私は高校を卒業した、天文部のメンバーもそれぞれ進路を決めた

私はバイトを掛け持ちして一人暮らしを始めた
母のいるあの小さなアパートから早く出ていきたくった

せいせいした、誰に何も言われることのない自由を手に入れたのだ
った

だが、それも長続きはしなかった

携帯代と家賃、あとはご飯はカップラーメンにでもすれば平気だろうなんて

そんな風に安易に考えいたことがそもそも間違いだった

光熱費はもちろん、高い水道代もガス代も、更には保険まで、全部大人の私が一人で払わなければいけないのだ

一人暮らしなのだから、当たり前のことだった

夢もなく、毎日がやみくもなバイト漬けだけの日常になった

大学生のように飲みにも行けず、洋服も買えず、髪を切るお金も満足に作れなかった

私が風邪で体調を崩した月、母に家賃や光熱費を払ってもらった

私は、何も知らず一人で社会に出て、自分の甘さを痛いほど知った

今まで誰にここまで養ってもらったのか

誰に育てられて、ここまで健康に育ってきたのか

まるで一人で生きてきたかのような振る舞いしかせず

私は大馬鹿者だった

その夜、母が置いていった肉じゃがを一人で食べて泣いた

おふくろの味が染み込んだじゃがいもを頬張って、小さな一部屋の中でおいおい泣いた

私は恥を知って、母のいる生まれ育ったアパートに帰ってきた

しかし母は変わらず、おかえりと、全てを許して微笑んでくれたのだった

喜ぶ母は、少し痩せていた

今までの親不孝な生活を取り戻すように、私は母を大切にした

けれども私は、仕事から帰ってくる母に布団を敷いてあげることくらいしか出来なかった

そして、そんな無力だった私はようやく遅く、夢を見つけたのだった

‘多摩市議会議員’

生まれ育ったこの街、色んな事があり学んできたこの街で仕事が出来たかった

より良い街にと、恩返しが出来たかった

そこからは、死に物狂いで頑張った

出来るだけ母の負担が減るように、バイトをしながら独学で勉強した

そして、遂に私は夢を叶えた

同じ仕事場で出会った同い年の彼女と二年の交際の末、結婚もした

初めて孫娘を見た母の顔はそれはそれは嬉しそうだった

これでようやく親孝行が出来る

一端の社会人になれた

……そんなときだった

……おふくろが倒れた

まるで私への罰なのだろうか

今までの無理がたたった、過労だった、ボロボロだった

小さなころに隣にいた大きな母は、小さく、顔にはおばあちゃんのようなシワを刻んでいた

私が三十歳の夏のことだった

そして医師に言われた、癌だと……末期だと

余命は一年、そう宣告された

絶望だった、私は足から崩れ落ちた、意識がプツリと切れそうになった

その日の帰り、天文部の三人を乗せた車で泣きながら帰る途中

追い討ちをかけるように

……子どもを轢いてしまった

人を殺してしまった

それから一年間、私と母を知る三人の協力により

最期まで、この事実を隠すことになった

申し訳なくて……申し訳なさすぎて

全てを捧げて一身に私を育ててくれた母に

最後に渡すものが、あなたの息子さんは人を殺したんですよ

そんな風に刑事に問い詰められて、そんなしわくちやの顔で、ベツトの上で一人悲しく悲痛に最期をむかえるなんて

考えなくなかった……最後まで親不孝者の私でも

だから、この隠蔽を泣きながら謀った

一年後、一番の被害者の彼は黒いコートを着て刃物を握ってやってきた

あの日の少年とは豹変して、恐ろしい憎悪を纏って私達の前に現れたのだった

まさかと思った、身の毛がよだつほど恐ろしかった

三人とも、次々に腕を斬られて病院送りになった

彼は関係のない警察官まで巻き込んで斬った
人を殺すのも時間の問題だと感じた

おふくろの容態は医者が言ったそのままに、この三ヶ月で悪化した髪は細く抜け落ち、頬はこけ、いつ息をひきとってもおかしくなかった

ただ願った、できるだけ、一日でも長く生きて欲しかった
生まれてよかったと、いい人生だったと、私を産んでよかったと

そつ心から思っただけで最期をむかえて欲しかった

……だが

それを前に、私は更に犠牲者を出してしまった

高校生だった、それも五人

どこにでもいる目の綺麗な高校生だった

それは、いつかの私達を思い出させた
まだ幼くて、武器も持たずに戦えた
毎日を青春時代に生きる少女達だった

いつの間にか、私は大人になっていた
こんなにも…汚れてしまっていた

あと一ヶ月、あと一週間

その私の気持ちは揺らいだ
しかし未練はあった

根源の犠牲者である彼を逮捕することは出来ない

私は、彼女を前に言ってしまった

だから、こんな選択を選んでしまったのだ

………

これが、現在に至るまでの私の、この街に渦巻く罪の犯罪者の、一人の男の人生です

母が人生をかけて愛を注ぎ、惜しみなく女手一つで育てた馬鹿息子です

母を想い、親孝行をしようと努力した男です

人を殺し、それを隠蔽し、被害者の男の子を封じ込めた、全く卑劣な人殺しの大人の姿です

第1話

花火大会の末、ウィッチの正体を知った
天体観測の末、ウィッチの痛みを知った

生涯最高の旅路の果て、望んでいた現実とは違う方向へ、世界は変わった

答えも基準もない、理解する事も困難な飢えた真実は、最終戦を迎えようとしている

社会の壁に打ちのめされ、弾かれるように散ったあの日から数日

真夏に起こした二週間の奇跡のその後

僅かに歪んだ内側を除いた大変素晴らしい世界で、何も知らないその他のと同様

身をもって全てを知った皆もまた
すっかり大人しく、タイムリミットもない当然の日常に戻っていた
のだった

selling dayという名の、作戦という名目の

共有と対カルマの部活動も消えて

停学期間終了日 27日（土）当日まで、今日を入れて残り二日になった

お昼前に起きると、外は梅雨のような雨が降っていた

じめつとした湿気を街に与え、洗い流すというよりは汚しているような灰色の雨だった

当分は止みそうにないそれを窓から見つめ、寝すぎの気だるさに一人ベッドから起きる

「……長いなあ」

十日というのは、何もしない人間にはこんなにも長いものなのだろうか

朝起きる必要もなく、退屈で仕方がない、ずる休みしたような気分だった

今ごろ、他の生徒は当たり前前に授業を受けているはず

皆は家でどうしているのだろう

そんなことをまた頭にボーッと浮かべて、部屋着のまま携帯だけをポケットにしまう

部屋の扉を開け、一階に降りる

すでにおにいの姿はなくなっていた

お昼だというのに、分厚い曇のせいでリビングはどんより薄暗い

電気をつけ、空腹感もなく、ただテレビをつける

平日のお昼に見たいものなどない

ニュースもウィッチの話題はすっかり消え去っていた

「……はあ」

家にあったDVDも、ゲームも、パソコンでの動画鑑賞もさすがに飽きてしまった

携帯と睨めっこか、おにいの部屋の漫画を漁るか、BUMPのアルバムを聞く事くらいしか有り余る時間を潰す方法はなかった

冷蔵庫の中のプリンを食べた後、私はまた部屋に戻った

懲りもせず降り続く雨音だけが響く暗い部屋

苦い空気を薄く吸い、ベッドの隅っこに丸まって座り、窓一枚越しにかりそめの平和な世界を覗く

iPodのイヤホンを両耳にはめて、物思いにふける

（今頃ハルはどうしてるのかなあ）

考える事はまたそれだ

もついい加減忘れないといけないのに

どうしたって、考える事はそれだ

二週間の青春の呆気ない結末だ

あれが本当の終わり、あれは中途半端などではない
私達は夢を叶えたい、やれるだけやった

何度もそうやって未練がまし感情を封じ込める

「……ハル」

携帯を握りしめ、水槽のような窓から遠い空を見上げると、またあの日の衝動が目を覚ますようにうずく

携帯を開き、何の気なしに灯のアドレス宛にメールを作成した

「本文」

「灯 元氣ー？ 今日雨だね

…関係ないんだけど、変な意味じゃないんだけど

なんていうか、本当に、このまま終わっていいのかな？ いいと思う？

急にいきなり変なこと、ごめん またね」

……

成り行きで書いたはいいものの、送信するのに十分以上悩んでしまった

やっとの末、何回も読み返して、ようやく私は灯に送信した

しばらくして、携帯がバイブで鳴った

開くと、灯からメールが届いていた

- 本文 -

「雨さねー 秋ってカエルいんのかな？」

やれるもんならやりたいけど、残念だけど終わっ たんさよ、あたし
らは」

上下の内容になんとも格差を感じながら、灯からの文章を読んだ

(……終わった、やっぱり、そうだよね 当たり前だよね)

でも‘やりたいけど’という言葉に、少なからず灯もつつかりを
残しているようだった

少しだけその文章にやりきれない冷たさを感じた

「……………」

それ以上の返信は送らず、私は無気力に携帯を辺りに放り投げた

「…………ライブかぁ」

あれだけ楽しみにしていたライブなのに、今すぐにも行きたいと
いう気持ちはなぜか薄れてしまっている自分がいた

続けて、次はひよりにメールをした
解答は、灯と同じだった

有珠にもメールをした

これまた返信は同じだった

結果、送る前より虚しくなっただけだった

抜け殻のような妙に寂しい気持ちを増しただけだった

予定のない空白の午後に、何の密度もない時間は進む

夢の後と呼べるのか怪しい感情は

ひたすらゆっくりと、雨模様の隅っこで流れていくのだった

.....

明日の予定も、とくにない

- 9月26日 - (金) -

正午過ぎ、今日も起きると雨が降っていた

昨日と同じ類いの、どんよりじっとりした雨だった

沈んだ街並みを窓から見て、またため息がこぼれる

少しか風邪っぽかった

リビングにあったあんパンだけを取って、また電気も点けずに部屋に引き籠もった

.....

長い長い停学の間で、徐々に私の中で、行っではいけない選択へ進む方向に変わりかけていた

日常の延長にライブに行くか

日常を捨て、ハルを助けるか

社会的に一度犯した過ち、家族や関係のない人まで巻き込んだ大事件をまたするのか

もうアマリリスの能力も私にはないんだぞ？

見つければ、それこそ今度はきつと退学になるんだぞ？

（ねえ.....どうすればいい？ 灯）

真剣な面持ちで、懲りずに私はまた灯に昨日のようなメールを送った
少しだけ意志を前に出した文章を

- 本文 -

「灯、やっぱり私はこのままの気持ちでライブに行くのは、なんか嫌だな

ハルを助けたいって、思うことは本当に間違いないのかな？」

きっかけや、先導や、後押しや、きつとそういう気持ち欲しかった

自分は正しいと、一歩進み出す決断がしたかったんだ

けれど、そのメールの返信は、何分何時間経っても返ってくることはなかった

数え出してからいくつめかわからない、雨粒が垂れる窓を見つめながら携帯を握りしめていた

震動が来るのを待ち望んでいた

…しかし、携帯が震えることは二度となかった

ひよりと有珠にも、奏にまで躊躇しながらも送ってみた

なぜなんだろう、二人からも、奏まで、まるで無視するようにメールが返ってくることはなかった

(……………)

やっぱり呆れられちゃったのかな

往生際が悪いって、うつとうしかったのかな

そう思われちゃったのかな

.....

（…それが、皆からの宣告なのかな）

だめな事、やっぱりこの選択はいけない事

ハルは切り捨てろ、見捨てなくちゃいけないって、そういう事なのかな

私の考えは所詮はおせっかいの、でしゃばりなのかな

その瞬間、皆が、ずっと遠くに行ってしまった気がした……

そうして、夢と現実の狭間で悩み苦しむ葛藤の中で

停学は、ついに最後の一日を迎えるのだった

第2話

- 9月27日 - (土) - 停学終了日

決断の選択が迫った当日

少しだけ蒸し暑い朝だった

昨日まで降っていた重い雨は小降りになって

午後にもなればすっかり晴れた月明かりが見れそうな、そんな天気だった

(……?)

むくりと起きると、鍵のかかった部屋の向こうから料理をする音と油の匂いがしていた

おにいが鼻歌交じりに朝ごはんを作っていた

だらしないあくびを一回して、もぞもぞと身体を伸ばして充電器に刺しっぱなしの携帯を開く

(…やっぱり)

予想通り、受信も着信の表示もない

リアクションもなく、起きたばかりの布団に顔を突っ伏せる

その数分後だった、意識もはっきりしだした頃だろうか

そんな穏やかな朝のヒトコマを

トゥルルルッ！！

唐突に、一本の電話がつんざいた
一階の家の固定電話からだった

不安がよぎり、それはことごとく的中した

おにいが多磨中央警察署に呼ばれたのだった

理由は他ならない、私の犯した責任と謝罪、尻拭いの為だった

おにいは二階に上がり、一事二事扉越しに話し

何もとやかく言う事なく、せつかくの休日を潰して出向いていった

(……………)

すぐに罪悪感が胸を覆い、扉を開けることも返事さえもすることも
気まずくて出来なかった

……………

ガチャリと家のドアが閉まる音が響き、私も部屋の扉から俯きながら
ら出た

頭だけを怯えるように出し、探るように辺りを見渡してから部屋の
外に出る

トイレに行った後、ため息交じりに電気の点いたままのリビングに
向かうと

「……あ」

玉子焼きとウィンナーが乗ったお皿が、テーブルの上にラップを被せて並べられていた

その横には、小さなメモが添えられていた

「ご飯は炊飯器の中に炊いてあるから、朝はそれ食べて

遅くても夜ご飯には帰ってくるから」

ボールペンの柔らかい字で、そう書かれていた

包まれていたラップを剥がし、私はお茶碗にご飯をよそう

「……いただきます」

誰もいない食卓の中心で、私は手を合わせて朝ごはんを食べた

玉子焼きは甘口で、ウィンナーは少し焼きすぎていた

温かくて、とっても美味しかった

そしてとてつもなく……申し訳なかった

（もう夕方……）

夕方過ぎ、すっかり空も夜の表情に変わっていた

電気も点けずに、小さな呼吸のリズムが響く部屋の片隅に私は相変わらずいた

その中には唯一携帯の四角い光だけが揺れている

アルバムをめくるように、私はハルとのメールを読み返していた

たった数通交わしただけのメールにも、何度も読み返すと、この数日で育んだ色んなことが思い出せた

携帯を拾ったとき

ハルと弟の関係を知ったとき

ハルにハルと呼んでほしい言われたとき

それと同時に、その隅で脳裏に焼きついたハンバーグを泣きながら食べていた姿が巡っていた

桐島さんの気持ちも言い分も分かっていた

でも、私はやっぱりハルを助けてあげたかった

同じ体温を持った境遇の持ち主を、他人事には思えなかったカルマから

一度は成し遂げられなかった‘殺さない’という選択にだけでも導いてあげたかった

けれどもそれをすれば、ライブに行く事はきつた叶わない

以前のように街を敵に回し、全てをなくす結果になるかもしれない

それほどの代償と犠牲を生む覚悟は

悔しいけど、……今の私にはない

私だって、所詮自分が一番大事なんだ
ただの平均以下の一人の高校生なんだ

‘どれか一つを手に入れば どれか一つを必ず壊す’
それがこの街の現状

(……………)

悔しいほど実感した

でも、そんなものを絶対に認めたくない

出会った一人の人生が潰れる瞬間を、指をくわえて、ライブ会場で
笑いながら感じていたくなんかない

ハルは犯罪者になるような人じゃないんだ

私達と同じように、人の痛みがわかるとっても優しい高校生なんだよ
形は違っても‘同類なんだよ’

(ハルを助きたい……)

晴れて皆とライブに行きたい……ッ
でもどちらか一方しか選べない

……………

「うっ、ヒクッ…… もう……どうしたら……いいのっ」

気がつく、どうしようもなく泣いていた

心の形を剥き出しにして、ひどく唇を震わせていた

雨音に混じってぼたりぼたりと両目からこぼれ落ちていた

「ぐすつ…っ わがままなのかな…ッ やっぱり…」

結果が出た後に後悔だけはしたくない、もっと頑張っていればなんて絶対思いたくない

こんな結末 夢にまで見たものじゃない、まだきつと栄光の夢への途中なんだ

終わりなんかじゃないんだ

じたばた努力すれば、もう一度本気を出せば、もっと変われるかもしれない

（戦いたい…もう一度戦いたいよ…ッ皆）

受信のない、二週間分の汗と涙が染み込んだ携帯電話に水滴を落とす

ガチャッ

そのときだった、家のドアが開く音がした

私の不始末を終えたおにいが帰ってきたのだった

(……………)

一瞬で、現実に取り戻された

現在地を突きつけられた

今でさえ迷惑をかけてるのに、これ以上また懲りもせず周りの人に迷惑をかけるのか？

(……………)

……………ここらが、潮時なのかもしれない

いい加減、夢見た子どもからは目覚めろって事なのかもしれない

他の大人のように、困難な現実からは目をつぶれということなのかもしれない

(頑張つて、私もその大人の一員にならないといけないのかな……)

叶ったはずの未来はすっかり敗北感を滲ませていた

部屋中に生乾きのような湿気の臭いがまわりつき、何もない萎れて干からびた日常と、ずっしりした空気が胸を冷たく圧迫していた

……………

夜も更けた頃

まだ、小さな悲鳴にも似た涙声は響いていた

じっと息を押し殺して戦うように続いていた

からっぽの押し入れ

壁にかけられた制服

未だ何も表示されていない携帯の画面

胸が裂けるような痛みが貫き、膝を抱えて身体を軋むほど丸める

誤魔化して生きたくない

知らんぷりもしたくない

(……頑張りたいのにッ)

許されない、いけないこと、間違い

「……うっ……あッ」

両手を爪が食い込むほど握り、歯を噛み込んだ

切れるほど唇を噛み、人には見せられないぐちゃぐちゃな顔をして泣いた

冷たい夜に、壁際に背を押しつけて……自分の中と戦っていた

その瞬間だった

「ゆり、ちょっといいか」

(……ビクッ)

突然、おにいが閉じ籠っていた私の部屋の前に立ち止まった

「ッ……ぐすっ」

はっとして、泣き声を殺して私は黙り込んだ

「……………」

足音が遠ざかることもなく、鍵のかかった扉を挟んで少しの間が生まれた

そして、おにいは静かに口を開いた

息を飲むように、心を落ち着かせて言った

「ゆりが今何をやってるのか、何を追ってるのかは俺は分からないけど」

「もしまだ仲間と一緒にやり終えてないことがあるなら、やり残したことがあるなら俺や周りの人間のことなんか気にすんな」

「……………っ！」

思わぬ言葉に詰まりきっていた気持ちが揺らいだ

「もしお前が最後までやりたいことがあるなら、いくらでも迷惑なんかかける」

「……うつ……ひくっ」

強かった、どの言葉も私を前へ立ち直らせた

「大人になった後の後悔や失敗は確かに恥だ けどな、若いころの後悔や失敗は宝だ」

「何も知らず仲間と共にぶつかれる挑戦は、今のお前達のころにしかできない」

黙り込む私へ向けて、頑丈な扉の向こうからおにいは続けた

「今、いっぱい失敗しなさい、いっぱい悩んで、そして努力しなさい」

「最後まで、やりなさい」

「…！…うつ…ッ」

思わず大粒の涙が溢れてきた、感動するほどたまらなく嬉しかった
泣いてることなんて始めから気づかれてるのに、胸が苦しくなるほど感謝に震える息を殺した

そして

「…はいッ…！！」

感きわまつたずるずるの鼻声で、これでもかと精一杯の大声で返事をした

おにいは全てを見透かしていた、これほどの迷惑をかけたのに嬉しそうな吐息だった

家族として持てる全てを預けてくれた

背中を押してくれた

そして、おにいには最後に付け加えたように
恐らく、その為に、私に言った

大事な、本当に決定的な事を呟いた

「そっぴや……玄関の前で、お前の、友達、が待ってゐるぞ」

「えッ！？」

思わぬ言葉に耳を疑った
赤く腫れた瞳を見開いた

その瞬間、今自分が立っているシチュエーションを理解した

気がつくと思考より先に私は一心不乱に立ち上がった

今の今まで籠っていたのが嘘のように軽い身体で
身を乗り出して部屋の扉の前に立っていた

(…はあ…はあ)

ドクンッ

ここを開ければ、もう二度と戻することは出来ない

ドクンッ！

ここを開ければ、世界はまた敵となり振り出しに戻る

ドクンッ！！

ここを開ければ、世界はまた変わることが出来る

開けるんだ！ 変わるんだッ！ 私達の夏へッ！

一度破れたこの街のカルマを今度こそ解消してみせるんだ

（戻ろう、私の主戦場へ）

そして、十日間引き籠っていた扉を

（行けええええッ！！）

胸を張って、私達の‘夏へと通じる扉’を勢いよく派手にぶち開けた

私は、答えを見つけた

ふと見た空は、このところ降り続いていた雨もすっかり綺麗にあがって

声援を送るように、澄みきった濃い空が月明かりを部屋を照らしていた

新たな青春がはじまった

第3話

固く閉ざされていた扉を開くと、通路のすぐ脇にはおにいが立っていた

「いつてこい」

視線は合わせず、代わりにただ一言、そう深く私を後押しした

（おにい… ありがとう）

思わずずるずるの涙を右腕で拭った

あんなに苦しかった日々が嘘みたいだ

言いたいことは山ほどあった、感謝も謝罪も迷惑も…

でも分かりきったありがとうやごめんは連呼せず、私は頭を上げて深く頷いた

言葉数少なく瞳に涙を浮かべて、その一言にありったけの感謝を込めて述べた

「行つてきます…っ」

そして、仲間の待つ扉を目指して走り出した

駆け出したその背には、微かにポツリと‘…これでいい’と見送る家族の優しい声が一人言のように聞こえてきた気がした

玄関めがけて一直線のスピードは加速していく

充実した躍動感に身を浸して、手加減なしに真っ直ぐ伸びた両足が階段を叩いていく

なまけきっていた身体中の細胞が久しぶりの活路にウズウズ沸き立っていた

「はあ…はあッ」

ずっとつきまとっていた背中の重みも、何の突っかかりもなかった退屈な日常はどこへやら

もったいないくらいの衝動感が真夜中の空気を清々しく一変させた十日間のブランクを全く感じさせない軽い足がなりふり構わず目的地めがけて突っ走っていく

素足のまま階段を大げさに二段飛びして、つまづきそうになっても前へ前へ走る

久しぶりに感じたこの鼓動の高鳴りが、肺を内側から引つ張られるようなこの脈動感が

たまらなく嬉しいッ！

変えてやるんだ、ここからもう一度変えてやるんだ！、必ず辿り着くんだ！

終わりがたくないんだあッ！

そう身体中がバラバラになるほど叫んでいた

涙を浮かべていた瞳はすっかりビー玉のような光を得て、息を吐く唇は無性にワクワクして笑みを作っていた

そして

息を切らしてつまづきながら家の扉に手を伸ばすと

前屈みのままガチャリと重く頑丈な扉を開けると

弾けた視界の先には

「なんだ、全然しょぼくれてないじゃん」

「…あ…あ」

「…リハビリだ！ ゆりっ」

ペールを剥ぐと、灯の甲高い叫びが鼓膜を震わせた

雨上がりの空はこんなにも大胆に塗りつぶされた

目を凝らすと、広大な夜空のパノラマをシルエットに、制服姿の四人組が家の前に乗り込んで立っていた

悪巧みにニツコリ笑う栗色の癖っ毛のリーダー

その横にはふふつと微笑むカーディガンを着た背の高い根暗少女

天使のようなあどけない笑みを浮かべてしゃがむ小さな純白の女の子

ブスツと無表情で三人の脇に少しだけ身体を逸らして立つ夜の住人
のようなミステリアス娘

「皆…どうして」

雨上がりの月明かりの下、反逆の旗を掲げるように四人が絵になっ
て揃っていた

「決して悪くもない未来だったんさけどなー、でもずっと四人で昨
日考えてたらさ」

「なんかやり残した事があるっていうか、あたしらもさ、ゆりのメ
ール読んでやっぱりこのまま大人しくこんなんで終わるのは嫌だっ
て、負けっぱなしは嫌だって、そう思っちゃったんさよ 馬鹿だか
ら」

すると、四人は懐からもぞもぞと取り出して、それを私の前に見せ
つけた

「だから、あたしらはもう一度『痛みを共有する』」

その手には、なんと退学届が握られていた

「もしだめなら退学してやるっていう覚悟の『共有の契約書』みた

いなもんだ」

「……それって!？」

「selling day 再結成だッ!!」

「…ッ!」

鳥肌が立った、全身がそのフレーズに痺れた

「ここまできたら最後の最後まで付き合いますよ」
ひよりが長い髪をなびかせて不敵に微笑んで言った

「もう一度、僕も逆らうのです!」

銀色の髪と青色の瞳の少女の僕も目を輝かせて続いた

「……こくりっ」

奏のほうを見ると、ジト目のまま一度だけ頷いた

「でつかい事してやろうぜッ! 学生生活を賭けた大博打だ」

「……っぐすっ」

泣き終えたはずの涙が、またじわりと滲んで溢れてきた

「……本当に…馬鹿っ」

嬉しくて嬉しくて、無防備に流れるそれを隠すように、照れ隠しに
私は瞳を前髪で伏せた

言葉とは裏腹に、目の前の灯は単純なほど満足げに笑っていた

(…でも…)

「皆…ライブは…？、ライブはどうするの？ まさか諦めちゃうの？」

「少しだけ嗚咽を交えながら、唯一の心配要素を私は口にした

カルマと引き換えにしてしまっ、その大きすぎる代価だ

「ライブには絶対行くのですーっ」

「真っ先に有珠がにゅーっとなび上がりそんな不安を打ち消した

「ふふっ、もう私達恒例の付き物ですね、ゆりちゃん、タイムリミットですよ、」

「……え」

「そうさ！、三日間で世界を変えてやるんだ！」

「澄んだ空の下、灯が胸を焦がすほど熱く声を轟かせた

「ハルはあたしらの友達ってわけじゃない、けど親友の大切な友達だ、だったら全員で助けるしかないじゃんか」

「ライブには本当にやりきった後で行きたいのです、中途半端な気持ちには嫌なのです」

「ゆりちゃんのいないライブに興味なんてないですからね」

「…ボクも……力になれるなら」

全員が団結し、真剣にこの街の真実の向こう側に行こうとしていた

「救いに行こうッ まだ時間は三日も残ってる！」
灯が手を差し出していた

「あ……あ」

言葉にならなかった

孤独な仲間がもう一度集まり、夢を追おうとしていた

「……………」

限りなく絶望的に不利な状況にいることは間違いない
失敗すればライブには行けず、それどころか今度こそ退学は間違いない

それくらいのリスクを背負わないときつと逆らえない戦いだ……

自殺行為だ、普通ならここは大人しくやり過ごすのが当たり前だ
だけどね

（……そうだ）

私達は、私達こそが

（……selling dayなんだ）

その名の通り、私達を売り込む出航の朝だ！

ここで一步踏み出せば、目の前には劇的な変化が、紙一重の凄絶な
戦いがきつと待っている

本当に叶えてしまえる、カルマの法則さえ覆してしまえる

そんな夢みたいな大逆転がこの五人とならしっかりイメージ出来てしまう

(……………)

だから私は、もう一度ボーダーラインを越える決意をした

「私も、全てをかけるよ」

胸を張って、星もない静かな夜に、最後のチャンスをカルマへと踏み出した

日常を捨て、街中がまた敵にまわった

けどやっぱり、私達の分岐点は、進む道はこうでなくちゃだめだ

圧倒的不利な状況やリスクな時間の中でも、何度でも諦めずにカルマと対峙してきた、そして消化してきた

それが私達の青春だ

「じゃあ早速、作戦を考えにこれから日だまり喫茶店に、お泊まりに行くぞ！」

そして再び、弱者達は気高き執念を持ち、戦場へ再臨する

負けない為に、後悔しない為に、力と危険を共有し

たった一つの終わりを迎えるため、三日間で世界を変えるため、落ちこぼれは立ち上がる

第4話

女子高生になって初めての夏

皆で始めた一ヶ月最後の週末、ついに私達はここまで来た

最後の最後、最終戦突入だ

現状を打破して打って出た再始動のスタートは

女の子だけの‘お泊まり会’という、華々しい意味とはまるで正反對の大作戦会議の夜更かしで始まった

残された三日間を最大限に使うため、この勢いを途切れさすことなく今から日だまり喫茶店に泊まり込むことになった

なんだか私はそれだけでドキドキして、門出の酔い心地に歓喜していた

現実とはかけ離れた一世一代の大チャンス、久しぶりの完全アウェイの感覚が跳び跳ねたくほど無性に嬉しかったんだ

終わるまでは帰らない、警察にも邪魔されない方法で私達はもう一度絶望と手を繋いで動き出した

.....

皆を家の前で待たせたまま、私は慌てて身支度を始めた

駆け足で部屋に戻り、何日かぶりに新しいブラウスに腕を通して制服に着替え、ぐしゃぐしゃだった髪をポニーテールに結わえる

ブラウス一枚だけじゃ少しだけ肌寒かったけれど、なんでだろう、なぜかベストもカーディガンも羽織りたくなかった

床に置いた学生カバンの中に三日分のブラウスや下着の替えをぎゅうぎゅうに入れる

顔を上げて見た編み戸の外はすっかり晴れ渡り、待ち遠しいほどに私の胸を高鳴らせた

生徒証に、薄いお財布にあるだけのお金を詰め込んだ、他にも iPod や色々と使いそうな物をしまいこんでいく

余ったスペースには歯ブラシや充電器、また月曜日から始まる学校に必要な最低限の筆記用具をしまった

もうこれだけで旅支度のカバンはパンパンだった

重い学生カバンを背負い、携帯をポケットに入れて、編み戸のまま部屋を出た

最後に、リビングでイスに座ってテレビを見ていたおにいに一言だけ別れを告げた

これから大変な迷惑が被る事も重重承知の上で、おにいは何も言わず、紅茶をすすりながら小さく手を振ってみせた

(……………)

きつとやり遂げる決意を無言で交わし、私は全ての平凡を手放して、その場を去った

小走りで玄関に向かい、使い古したローファアを履いて、私は助走をつけて夜に身を投じた

そして、右足はゆっくりと仲間のいるスタートラインへ踏み出した

「……………」

世界は広がり、眠れぬ夜の旅が始まった

（ねえ、ハル、私ね…）

こんな境遇にあっても、こんな逆境のど真ん中でも

私は一瞬でも自分が運が悪いなんて思ったことはないよ、ないから

こんな状況でも…、こんな状況でも…

必ず、立ち向かってみせるよ

どんなに弱くても、諦めない、って、それをこんな風に思えた自分はきつと不幸なんかじゃないって

学校中にだって叫べるよ

（ねえ、ハル、貴方はどうかな…？）

私は貴方に言いたい言葉がたくさんある

周りの奴らに勝手に運の悪い悲劇の主人公だなんて思わせたくな
いだからこそ、このまま傷だらけの貴方を見捨てて終わらせたりなん
か絶対にしない

……タイムリミット？、成功率コンマ以下？、カルマの法則？

いったいそれがなんだってんだッ

変えてやるさ、ここは私達の街なんだ ッ！

主役は誰でもない、私達なんだ

約束だっていい、どんな手段を使っても、最後には貴方のカルマ
を消化してみせるから ！

始まりのページを彩るような、真夜中の静けさが漂う並木道を進む
雨上がりの開放感と清々しさをたっぷり含んだ外気は、胸一杯に吸
い込むと生き返ったように若々しかった

街灯だけの光がポツリと殺風景な道路を照らし、まばらな車が街を
抜け出した女子高生五人の横を通過していく

僅かに流れる虫の鳴き声は涼しく、風に揺れる青い草の匂いが興奮

を上乗せした

奏以外パンパンのカバンを肩にかけ

今にも見せつけてやるんだと、私達はそんな夢心地でいつもの道を歩幅を大きくして進んでいった

.....

「威勢よく出たけど、さてこれからどうするかなー」

いろは坂に入った辺り、隣を歩いていた灯がふと呟いた

徐々に景色は高く遠くなり、私達以外には誰もいない、ただっ広い夏色の坂道を白線も無視して自慢気に真ん中を歩いていく

そういえば、今更ながらに思えば灯の腕の包帯も、ギターの弦で切った有珠の指先も、無茶をしたひよりの指の怪我もすっかり治っていた

「作戦全く考えてないの？」

「正直まーったくの白紙だ、てかどうすれば勝てるのかも全然想像できないさよ」

灯がうーんと両手を頭の後ろに組んでお手上げとばかりに言った

「ですが現実問題、あと三日間で私達は何かしらの策を練らなければいけないわけですからね」

背の高いひよりが悩む灯の横で続けて言う

「にゃんにゃんおー、きつと大丈夫なのです、喫茶店に行けば必ず

何か思いつくのですー」

不意に出た久しぶりのにやんにゃんおに
思わず三人とも本題を忘れて、空のスクリーンに自然に安堵の笑み
をこぼした

きつと大丈夫、その一言を聞くと

たとえアマリリスがなくても、ウィザードが使えなくても、スイミ
ーがだめでも

不思議と本当になんとかかなりそんな気がしていた

前を歩く奏の後ろ姿は真っ黒だった

真っ黒で、慣れないぎこちない動きでちゃんと四人と同じペースを
重ねて歩いていた

「そうだね…、そうだよね」

「明日を乱したくなる」余白いっぱい坂を歩きながら、そんな気
持ちで私はたまらず身体がうずいた

見上げた空は見たことがないくらい澄んで果てしなく広くて
左手の雑木林にはまだカブトムシがいそうだった

そしてようやく、私達は新たな活動拠点に到着した

恐らく三日間私が生活することになる、小さな町外れの喫茶店

「日だまり喫茶店」

橙色の光がないとただの小さな廃墟のようだ

ザッザッと足音を鳴らしながら五人は裏手に回った

森の匂いの中、カチャンと鍵が開く音が辺りに響き、奏を先頭に入っていく

「うつわ めっちゃ籠ってんな」

何も見えない中で灯が声を発した

その言葉通り、中は全く換気がされていないのか、十日分の淀みきった空気で充満していた

ずっといたら頭が痛くなりそうな、まるで体育館の倉庫のような臭いだった

しばらくして奏が小さな店内の照明を点けた

すぐに温かみのあるオレンジ色が店内を包み込んだ

「……何もないけど…夜ご飯 準備してくるから…」

片言でそう言い残し、奏は奥のキッチンに入ってしまった

その瞬間、旅先の宿舎についたときのように、いつものテーブル席に重い荷物を皆揃って下ろした

「はぁー 重かったあ」

灯が遠慮なくイスにとっぷり座る

それぞれカバンを開いてお泊まりの準備を始めた

ごっそ開いた灯のカバンの中から取り出された物は

「……………」

C D、C D、次はと思いきや、またまたC D

おや？、出てくる出てくるC D

ん？、今度こそは…！ と、もちろんC D

「……………ねえ灯」

「んー？」

鼻歌交じりにがしゃがしゃ鳴らす手を止めることなく灯は返信した
その間にもテーブルの上にはC Dが積み上げてられていく

「これは少々おかしくない？」

「どこがー？ 非常に一般的なお泊まりさよー まあ、場所は特殊
だけだな」

がしゃがしゃ、がさがさ

（……………）

「いやいやっ、お泊まりというより今貴女の出している荷物があり
得ないほど一般的じゃないんですか！？」

「おー！ 久しぶりのゆりのツツコミだっ たまらん…！」

(…………えー)

自由すぎる灯の圧倒的空氣に瞬きを忘れる

「まあアレさよ、灯さんから音楽を奪ったらパワー半減だから大事なんさよ キリッ」

最後とばかりに、萎んだリュックの中からミニコンポが我が物顔で登場し、テーブルの上を占領した

灯は相変わらずくっしやり笑ってみせた

「にゃくにゃん〜おー」

半ば呆れて前の有珠の方に視線を移すと

(ツ！？)

「ちょ、ちよつと 待つて有珠」

思わず瞳の先の不意討ちに反射的に声を出してしまった

「にゃにゃ?? どうしたですか? ゆりも一つ食べたいですか?」

「いや大丈夫… ってそこじゃなくてっ」

視界の先には、パンパンに膨らんだカバンの中から出てくる

お菓子、お菓子、お菓子

駄菓子とお菓子の山!

更にはフィニッシュとばかりにロールケーキや和菓子やプリンまで出てくる始末

たちまちCD山の前にはお菓子の山がそそり立つ

「お泊まり会というわけですし 有珠急いで買ってきたのですっ
えへへー」

そして天使のような愛くるしい笑顔を見せる有珠
きつと本当に楽しみだったに違いない

(……………)

なんだかとてもじゃないけど有珠のあどけない笑みを泣き顔に傷つ
けるツツコミは出来そうになかった

「はあ…もう」

変に疲れた後、この人は大丈夫だろうと一番のしつかり者に目を向
ける

「ふふっ お二人とも個性的でいいですね」

包容力のある微笑みを浮かべながら、随分スペースを持ってくれた
テーブルの上にひよりの荷物が広げられる

日用品が出て、次にノートや筆記具、カバンの大部分をしめるノー
トパソコンを取り出した

(よかったあ…ひよりはやっぱり普通だ)

まったく、それに引き換えこの二人は、本当に戦う気があるのだろ
うか

「ふふっ ゆりちゃん、ごめんなさい」

「え??？」

と思いきや、カウンターの如くひよりはこっそり照れたようにカバ

ンから数冊の本をちらつと取り出した

ピンク色で覆われた表紙に女の子が二人抱き合っているラノベ

やたらとツンツンの髪の毛の青年がもう一人、女の子のような顔立ちの男子を捕まえるように背から手を回している漫画

「……………」

「まあーな、ひよりも女の子だからな」

「仕方ないのですっ ……モグモグ」

「ふふっ、少し照れてしまいます」

「ちょおおつと待った！！」

「ぬー、なんさよゆり クレーマーか？ 灯様そっいうの好きじゃない」

「違うよ、てか色々とツツコミきれないよ！ もうただの力オス空間だよ！」

「ゆりちゃん大丈夫です、一応全年齢対象です」

「そこじゃないよ！ というか私は読まないよ」

ひよりに関してはおちよくるように私の反応を楽しんでいた

「ゆりちゃんすみません、でも毎日眠る前に読んでるので癖になっってしまったんですよ 作戦には支障は与えませんか」

くすくす笑いながら、ひよりは口元をカーディガンからちょこんと

出した指先で押さえていた

「……まったく、もう」

テーブルの上にはこれから街と戦う人間の物とは思えない品が散乱している

困り果てて、私はツツコミを諦めた

（でも、なんだかこういう会話も久しぶりだな）

気がつくと、目の前の三人の光景に、思わず私も釣られて一緒に素顔になって笑っていた

それはいつかの、部室のお昼休みに似てた光景だった

奏お手製のオムライスを皆で一つだけのテーブルで囲んで食べた

お肉がたっぷり入っていて、半熟のとろとろ卵には喫茶店のコックさん・奏の腕の実力を見せつけた

カチャリと手元で鳴った綺麗な銀色のスプーンが更に食欲をそそつて、恥じらいも飾り気なく子どものように私は口に頬張った

感想はもちろん、口の中いっぱい美味しかった

なんだか喫茶店の夜にこういう風に食べていると、お泊まりというより、仕事前のまかない料理を食べているようで不思議な気持ちになった

奏も一緒に座って、一緒に食べながら賑やかに話に交ざった

一番最後に有珠がごちそうさまを言い

そして、私達はついに作戦を開始した

歯を磨くことも忘れて、時計の音も見失って、食器を片付けた後に、とびっきりの夢を目指して突き抜けた

籠っていた空気を入れ替える為に、蚊が入るとかそんな小さな事は何一つ構わずに

あちこちの窓を大げさに音まで鳴らして得意げに全開にしていた

洗い立ての真っ白いシーツがあっただら干したいくらいの、新鮮な空気を青い夜風に乗せて総入れ換えした

気分も幾分か晴れやかになり、月明かりが差し込んだ店内の中心で、五人はテーブルを囲んで

長袖の袖口を捲り上げて、作戦を開始した

第5話

ようやく、ここからが出発点だ

クジラだって飛んでそんな希望に満ちた月夜の下

騒ぎ出した胸は熱を増して、逆らう意欲を膨らませて私達は勝負の夜を企てた

開け放たれた窓からは、まさに出航の朝にふさわしいマイナスイオンたっぷりの風が吹き込み、狭い部屋を最大限に広く使っている

更にはどっから持ってきたのか、テーブルの上には体育祭や行事でしか使われないような、巨大な真っ白の用紙が広げられている

それはまるで、部室の据えられた机と作戦が書かれていた黒板のようだった

「さて、どうするか」

灯を筆頭に、黒ペン片手に考え出された策を協議していく

現在の街の状況から整理した私達の課題は

私達が警察に見つからず、当日、桐島さんのいる警察署までの道のりを攪乱し

そして警察より先にハルを見つけ、桐島さんを殺さないように説得し、導くこと

その後はどうなるかは分からない

けれども恐らくこれが真実を知った私達が、このカルマに介入する一番道徳的方法

- ・ ハルを見つけ、ウィッチから救い、殺意を取り除く事

あのハンバーグでもだめだったんだ、とても口で説得出来るとは思えない

ハルはそれほどの傷を抱えている

だから、この三日間でこれに関してもあらゆる策を練る

- ・ 警察を阻止する事

- ・ 桐島さんに会わせる事

二人が対面したらどうなるかも分からない

今更ハッピーエンドは求めないし出来そうもない、結局どちらかが潰れて終わるリスクはある

だけどきつと両者の言い分を交えるには、やっぱり顔を見て、声を出して話さないといけないと思うから

それが、一度はカルマによってバラバラに引き裂かれた私達の経験から導き出された

真実の向こう側へ行く答えだ

とは言ったものの、勢いだけは一端に、確かに現実的に考えると
なかなか案が出てこない

ウィザードの広範囲のフェイクも、誰もを欺くスイミーの芝居も、
そして重量ゼロのアマリリスの攻撃力も

今はもうない、全てが見つかってしまったのだ

つまり今、ここにはただの女子高生が五人いるだけ
ただの弱い、無力で普通の女子高生がいるだけ

それでどうやったら勝てる？

三日間で、どうやって一度敗れた街を倒してみせる？

どこをどうすればいいのか、全く想像も出来なかった

「……………」

さすがの灯も今回ばかりは手の動きが止まっていた

「どうでしょうか」

そのまま数分、ほとんど空白の用紙を囲み

立っでは中腰になり、また行き詰まり座つてをメンバーは繰り返して
ていた

「ほにゃあ」

誰しもが、やっぱり無理なのかと、薄々でも頭の片隅で思いかけて
いた

無駄に広い白紙が嫌なほどまじまじと気持ちを比例して

なす術がなく、力をなくした私達では無理なのかと

協議の時間を重ねるほど、偉大すぎる夢の逃げ口を塞がれるように
地に足をついた現実には、直面した沈黙の世界に痛感させられていた
ついに、灯の手から一度ペンが置かれようとした

そのときだった

「ボクの『友達』の輪、…使う？」

突如として、現状を劇的に破る、満天の部屋に響いた声

「…え？」

なんとそれを放ったのは、終始無言を貫いていた、あの奏だった

それまで重かった部屋の空気を青い爽快感がガラリと変え
目を疑うほどの凛々しい眼差しをジト目少女は向けていた

「え…友達の輪って？ 奏の友達？」

「……こくっ」

奏は青白い肌を向けて一度だけ頷いた

「失礼さけど、あんまり奏にそんな友達がいそうな気がしないんさ
けど」

「お気持ちはありがたいのですが、残念ですが、あと一人や二人同年代の友人が増えたくらいでは何も変わらない気がします」

「にやう、というより、この秘密を今更誰かには話せないのです」

囲んだテーブルで、冷静すぎる言葉が飛び交った

「……………」

脇に立っていた奏はそれから言葉は発することなく

代わりに

悩む四人に向けて、
携帯電話の画面を見せつけるように、反発するように突き出し

「……みどり団……」

これでもかと小さな声を張り上げて、
そう状況を打破する切り札を差し出した

「……………??」

意図が掴めないその強い発言に四人は戸惑いながらも

何かを感じ、とてつもない勢いに光る画面に釘付けになった

沸沸と胸がざわめいた

(…ドクンッ)

なんだろう、これだ、この感じ

何かが、変わる予兆ッ

どこかのサイトだろうか

画面にはホームページが開かれ、そこには三つ葉マークのマークが描かれていた

「みどり団って??」

灯が問いかけ、その瞳には何かを期待しているようだ

「東京、特に多摩地区を中心に活動する…、高校生だけの『登録制SNSコミュニティサイト』」

「…！　そうかッ　なるほど、SNSサイトか」

「え？なに??」

いきなり灯は身を乗り出し、明らかに先程までとは目の色を変えて奏に聞き返した

構わず奏は話を続けた

「…ログイン資格は…高校名と年齢、そして自身のユーザー名と『痛み』をトピックに書き込む事…」

「痛み？でしょうか」

ひよりは分析し、有珠は分かんずぽかんとしていた

「……何かしらの問題を抱えた高校生がそれぞれに様々な痛みをトピックに書き、また別の痛みを抱えた高校生がその人のトピックに書き込み、助けを協力する……」

そして……その書き込んだ人の痛みにも、また恩返しや他の高校生がそのトピックに書き込み助ける……そういうシステムのSNSサイト 君たちと同じ、痛みを共有する、サイト」

(…カルマの法則)

「面白いな！、いや、めっちゃいいさよっ」

すっかり干からびていたのはどこへやら、灯は感情を露にして悪巧みの笑みを満面に浮かべていた

少しずつ、私も二人も躍動感に飲み込まれ、徐々に奏の狙いに気がついていく

「そして……このサイトを作ったのは、…何かに自分を残したいと昏睡状態に陥る前に設立した、正真正銘、ボクのお姉ちゃん……」

だから故に、みどり団」

「つまり、今は奏ちゃんが管理権限を持っているというわけですね」

ひよりも冷静に頭を使って整理していた

「……こくりっ」

奏は確信をつくように頭を縦に振った

「で？ 肝心の登録数は？」

灯が溜まった感情を並々まで膨らませて素早く切り込んだ

それに奏は嬉しそうに、相変わらずミステリアスな表情でニヤリと

返した

もうわかるだろ？とばかりに、挑戦権とチャンスを授けた

「……今は、262人、だよ、多摩地区で、小さなサイトだからね」

「そうか、いや、十分すぎるくらい十分だ」
その瞬間、灯の瞳は潤った

策士は、起死回生の一手を宿して不気味なほど無敵の笑みを浮かべた

「ほにゃあー なんだかワクワクしてきたです」

「もうカルマも能力もカラッポなんですよ…だったら…せめてお姉ちゃんが残した、この‘カルマと能力’使って…」

水面下で、勝利へのピースが揃い始める

灯の行動力と、もういない一人のメンバーのカルマが化学反応を起こし、空白を埋め尽くす

「凄い…なんか、本当に不可能じゃないかも、叶えられるかも」

真夜中に手のひらには汗を滲ませて、夏休みを彷彿させるワクワク感が部屋に充満していた

「そうさよ、これを軸にすれば三日間でも十分作戦は考えられるのさ」

「あとはどう駆使して、どうか使つかですね」

「まさに大作戦なのですっ」

希望の切り口を目の当たりにして私達は浮かれていた

そのときだった

「……でも使うなら、一つだけ条件が……」
奏が最後にボソツと言った

「？条件？」

「あうー？」

チヨコバットを口に突っ込んだ間抜けな顔で有珠も首を傾げた

「……………」

口ごもり、一定の間を置いた後

空気の温度差を変えて

勇気を振り絞るように奏は思いきって言った

「ボ……ボクを、…このチームに入れてほしい……」

顔を俯かせて、いけない事をした後のような消え入るような細かい声で、その胸の内をさらけ出した

言い終わった後に、奏は少しだけ自信無さげに口を閉じた

その瞬間

「は??」

「奏ちゃん? 何を言ってるんですか?」

思わず、私も二人と同じ気持ちを抱いてしまった

「……そう……だね、ボクなんて」

引き籠もりだった夜の住人は、打ちのめされたように表情を冷たく曇らせた

(……奏も馬鹿だな)

だって、なぜなら

「言われなくたってもうお前はとくにselling dayと痛みを共有したメンバーだろうがっ」

「ふふっ あらたまって何を今更ですね」

「そうなのですっ、奏はとくに仲間なのです お菓子もあげちゃうです」

(十日も前より仲間なのに、私達)

「……っ!」

ジト目を見開いて、目の前の仲間を見ていた

奏らしくもない震えに、それは驚いたように、それは思い返すように

立ち尽くし、瞳はバツと濡れていた

「なんだ…そうか…っ…」

目の前の幸せを、泣き笑い、誤魔化さずに嗚咽を交えて噛み締めていた

「ボクは…もう…ッ」

「遅せえんさよ気がつくのが、当たり前だろう」

両頬から白い雫を落とす新メンバーを見て、灯はケラケラ親しげに笑った

ひよりは微笑みを絶やさず、有珠は心からの満面の笑みを浮かべて寄り添った

「そうだよ、私達は仲間だ、この五人が、私達が selling day だっ」

私は、少しだけ感動していた

「……………ぐすっ」

奏は、滴り落ちる涙を隠さなかった

それは、まるで一昔前の私を見ているようだった

……………

私達は相変わらず何もかも欠けていて

相変わらず、防御を張る前に不意に來た手作りの優しさには成す術もなく

免疫もなくぼろぼろと涙を浮かべたりしてしまう

それが、体温をなくした私や、レズビアンなんかの灯や、接触障害のひよりや、見た目の差別に苦しんだ有珠やなんかで

友達もいなかった、希望もなかった、痛みしかなかった同類で

だからよくわかるんだ、その涙が出てくる理由が

とってもよくわかるんだ

そんな、ばか正直に泣くほどの幸せに出会えた訳が

.....

それをもう経験した四人は茶化すこともなく
ただただそっと呼吸を合わせて、新しい仲間の前で

月夜の光が差し込む橙色の中で、
ゆっくりと懐かしい瞬きをしていた

第6話

誰もが眠る壊れた世界の隅で、まるで嵐が来る前の楽しい真夜中に懲りずに、腹ペコの余白に夢中になって私達は試行錯誤の策を書き足した

お馴染み、街に迷惑をかける、危険だらけの策です

開けっ放しの大きな窓からは涼しい夜風が部屋をなびかせ染め上げている

カウンターの奥、昨日新しく買い替えたらしい奏の新品のノートパソコンを前に

五人は秘密基地のような狭いスペースの中でぎゅぎゅくに身を乗り出して画面のサイトに食らいついた

割り当てられた役割もない、まだ原石の新たな戦略を目の当たりにする

私達のカルマは消化され、能力も失った
だから利用する事になったんだ

一度きりの最後の賭け

残されたあらがう術

新たな新メンバーの能力‘みどり団’を

「トピックの掲示板の他にメール機能まであるのか、プライベートメッセージ、URL、画像の添付も可能　これは予想以上に使えるさよ　奏　」

奏がイスに座り、すぐ横に灯が顔を据えてマウスをいじり、コミュニケーションサイトを隅々までチェックする

そこには新着順のトピックが広がり、救済の手が差し伸べられるのを待っていた

・訳あって親に嘘についてバイトをやめ、携帯代が払えない者

・隠れオタクで、親友にカミングアウトしたく、背中を押してもらいたい者

・友達がいじめられ、どうしても助けてあげたい、けれど一人で立ち向かう勇気がない者

・今年の文化祭でライブをしたい者

更には

・今日の帰り、本気で駅から飛び降りようとした、情緒不安定に自殺を志願する者

・昨日、出来心で他人から財布を盗んでしまった者

など、退学の危機にあるものや、はたまたゴキブリが出たなど他愛もない事まで

大小様々な、けれども本人には今もリアルタイムで真剣に悩んでいる問題ばかりだった

助けてほしい、こんな自分を変えたい、方法を教えてほしい

そしてそれに同じ境遇の高校生達がネット内で何百と提案し、手助けをしていた

大人になればきっと忘れてしまう怪物相手に、必死に戦っていたのだった

「ひより 少し聞きたいんだけど」

ずっと画面を眺めていた灯が腰を上げて問う

「はい？ なんでしょうか？」

「もしこのサイトに管理者からの緊急トピックを書いて、全ての登録者に9月1日に召集出来ないかメールを送ったら 警察とか桐島側には見つからないかな？」

「どうでしょう、やり方次第だとは思いますが、特に大きく有名なサイトという訳ではありませんし
具体的な作戦内容等はギリギリまで送らず、こっそりと慎重に行えば三日間なら平気だと思います

部外者には見られないようフェイクの方法はいくらでもありますから
後はそうですね、登録者の誰かが情報を漏らしたりしなければ大丈夫だと思います」

「つまり簡単には、一致団結させるトピック内容があつて、なおかつ内幕で進めればいいって事だよな？」

「簡単に言つてしまえばそうですね、仮にも設立者であり管理者からの緊急トピックとなればノリや便乗であれ協力者はいると思います」

「…凄い　こんなものがこの街の高校生に」

「なんだか鳥肌が立ってしまうのです！　262人の援軍さんなのですねっ」

有珠は期待に胸を弾ませて後ろで背伸びをしてぴょんぴょこ跳ねていた

「となると、人数は多いほどいいな」

考え込むように口元に手をあてるポーズをとって灯は企んだ

そして、すぐに次の行動に転じた

「ゆり、ひより、有珠、奏、ぜひ聞きたいことがあるんさけど？」

「……???」

あらたまつて、灯は意味ありげに問いかけた

私は期待に胸が踊っていた

「皆とネット内だけで繋がる、近場の高校生のネット仲間はいないか？」

（高校生のネット仲間??）

相変わらず、また灯は突発的に意味の分からないことを話した

「例えば、あたしだったらmixiの多摩コミュがある」

ぽかんとする四人を前に、恐らくフィナーレの計画が形成されつつあるリーダーは先陣を切った

きつと、もう灯の頭の中にはシナリオのヒントがあるんだ

「にやう、よくは分かりませんが、なるほどです だったら有珠もありますよー

よくお世話になっているサイトさんなのですが、チャットがあるです 高校生も多いのです

……実をいうとネカマなんですけどね ……にやはは」

「……ひより？ ネカマって？」

笑う有珠を横目に、見つからないように小声で隣のひよりに聞いてみた

「男性がネット上であたかも女性のように演じ偽る事、この場合は逆パターンですね」

（…そっか…有珠）

きつと、悪ふざけとか相手の気持ちを弄ぶ為なんかじゃないそれはそれはカッコいい、小さくていじめられたりもしない

銀髪で目も青くない、身体には足跡も痣もない

素性の分からないネットでだけ、せめてもの空想男子を演じていた

んだろうな

「そうですね、灯ちゃんというネット仲間といって私が該当するのは ブログの百合コミュニティくらいでしょうか 結構人数も多いです」

「ボクは……オンラインゲームのギルドになら、多分当てはまる人……いる」

「そういえば、前に言ってたもんね」

「……む……」

少しだけ私が馴れ馴れしく話しかけると、イスに座っていた奏は不機嫌そうにパツツンの前髪をジト目にかけて瞳を細めた

「う、ごめん……」

「そういうゆり君はないんさー？」
指揮官の声が届く

「私?? うーん私は……」

何かあっただろうか、有珠やひよりのようにチャットもブログもやっていないし

そして考え込んだ末

「あ……」

アレならと、とっさに思いつく

「何か思いつきましたか？」

「もう全然やってないけど一応、ツイッターは心当たりあるかも」
昔、なんとか友達が出来ないか、一人寂しく探していた悲しい時期の産物だった

「それだけあれば、最低でも200人は集まるだろうな、いけるな」

灯はぶつぶつ何かを言った後、バツと反転してひらめいたように四人に今夜すべき事を言っただけ

「この街に潜む同類全てを巻き込んでほしい！」

これからしてほしい事

というのも、携帯とパソコンから

mixi、チャット、ブログ、ギルド、ツイッター

ネット仲間の知り合いに当日、集まれる人がいないか総出で探す事

そして、みどり団に設立者からの緊急トピックをトップ画面に作成し、全ユーザーにメールを一斉送信すること事

更にひよりは、関係のないみどり団に万が一サイトが規制されて危害を与えてしまわないよう

念には念を、ダミーのサイトや避難場所を作る事

常識はずれの衝動に身を任せ、小さな喫茶店を発信源に
最終戦を前に、たった五人の少女達は街中の高校生、同じ境遇の敗
者をかき集めた

弱者は、本当にもう一度真っ向から街に対抗するのだ

ひっくり返してみせる

……

一般論で、常識的に冷静に考えれば

…どうせ三日なんかじゃ何も変わらないと、そう思うでしょ？

圧倒的逆境に、こんなゴミみたいな最下位の五人なんかでさって
たかが一つ残された小さなサイトと無力の高校生なんかが集めな
んかして、街を支配する大人に勝てるかよってさ

でもね、不可能なんかじゃないんだ

この五人ならきつと出来る、また奇跡をやったのけてしまえる

ここにいとね、なんでかな

一点の曇りなく、笑い声をあげて息も荒くして本当にそう思えてし

まえるんだよ

見てるがいい、これからカルマの法則を破る、私達の歴史的反撃の三日間を

部屋一面、空も夜風も甘酸っぱく染め上げて

終わりがけの夜、丘の上ではまだ名もなき最後の作戦の下準備が行われていた

夜通しで作業を続ける部屋の中、灯が持ってきたミニコンポから、B U M P O F C H I C K E N のアルバム曲がライブ並みの大音量で響いていた

濃紺色の野外にまで大声で歌うように突き抜けて

調子外れの灯の作業用 B G M は、屋根をなくしたように解放感と興奮で周囲を浸した

カチカチカチッ

そんな穏やかな中で、悪巧みは産声あげて、指は驚くほどスラスラと文字盤の上を走っていった

小さな店内、灯だけは立ったまま書き足された白い用紙を広げて、靴下を脱いだ素足でローファーを履き潰して作戦を考えていた

有珠は私の前、テーブル席の窓側に座り、小さな手に携帯を持ち、両手を使って真剣にチャットをしていた

口にくわえたポッキーはかれこれ何分だろうか
くわえている事も忘れたように、すっかりチョコの部分が溶けてなくなっていた

そんな有珠の横に座り、一番の大仕事を任されたひよりは自前のノートパソコンから協力者を探し

カウンター奥の奏がみどり団にユーザー限定観覧可能なトピックを書き込み、アップすると同時に

全アカウントに緊急メールを一斉送信していた

そして、私達五人全てのネット仲間からの返信も、ひよりのパソコンに全て送られるようにした

カーディガンの手元に置かれていたアイスコーヒーは表面に水滴を溜め、時折傾いた氷の音が涼しげに響いていた

灯のmixiページ、有珠のチャット、私のツイッター、奏のネットゲギルド

そしてひよりのブログコミュ

一晩経てば、一つのYahooメールのアドレスに集結するように、それぞれに張りつけた

みどり団はひよりの携帯のフリーアドレスとパソコンのアドレス

もしくはみどり団の管理者アドレスに届くように、トピック・メール それぞれ書き込んだ

サイト自体の保護も終了し、後は明日の朝

SOS信号から何かを感じてくれたこの街の傷持ち高校生達262人からの返事次第だ

頼むよ、届けよ、共有してくれ

これが最後の策なんだ

.....

作業を終え、私達は喫茶店の電気を消した

広げていた作戦用紙は丸めて脇に立て、ひよりはノートパソコンを閉じた

歯磨きをして、トイレも済ませて、少しだけぺったりの髪は不思議と気にはならなかった

全員が横になれるスペースはともなくて、元より布団もなく、私達はそのまみイスで座って眠った

灯は無防備に足を広げて、頭を天井にあげて、まるでぐーといびきを出すように口を開けて眠っていた

ひよりは丸まって、羽織っていたブカブカのカーディガンをすっぱり首までかけていた

鼻先から上をちょこんと出して、大人しくすやすやと眠っていた

有珠はテーブルの上に組んだ両手を枕にして、まるで授業中の居眠りのように、小動物のような愛くるしい寝顔を浮かべていた

たまに、うにやうにやにやんと寝言を発しながら顔の向きを変える姿に自然と笑みがこぼれた

そしてそんな私は、一人すっかり目が冴えてしまっていた

音のない夜は驚くほど静かで

イスに背を当てて、月明かりが差し込む窓から月や夜空をぼーっと見上げていた

新しい旅立ちの余韻に胸がまだ高鳴っていて、眠気はすっかり飛んでしまっていたのだ

「……………」

少しそのまま目を閉じたり、自分の呼吸を気にしてみたり
充電中の携帯を触ってみたり

あまりにも寝つけず、私は気分転換に腰を上げた

スカートをひらりとなびかせ、灯を起こさないように跨いで喫茶店

の重い扉を開けた

外に出ると、辺りに茂る木々は海の底のようにひっそりと深い眠りにつき

葉だけが冷たい風が通るたびにゆらゆらと音を立てて揺れていた

そんなどっぷり浸かった夜のふもとにじっと立ち、一人頼の酔いを冷ますようにたそがれた

「スーッ ハアー…ッ」

澄んだ外気を吸って、始まった感覚に物思いに更けた

（本当に、また始めたんだね）

（…きつと間に合うよね、今度こそ勝てるよね）

自分で出した問いかけのくせに、はっきりとした答えがわからず

いつの間にか、見上げていた首は下を向き、少しだけ現実味を帯びた瞳の先で足先は土をいじっていた

ザッザッ

そのときだった、音のなかった世界で耳元に土を踏む音が流れた

「眠れないのか？」

新しい寝癖をたくわえた、灯だった

「……うん、なんかついについて思うと目が冴えちゃって」

二人の間に優しい時間が流れた

これといって何もなく、そのまま喫茶店の前で話した

灯は立つたまま壁にもたれかかって、私はしゃがみこんで

他の誰も起こさないよう、ゆったりと浮かぶ雲の下で小さく小声で話した

「灯？ 聞いていい？」

「ん？」

視線は合わせず、横に立つ灯に何気なく聞いた

「あの…さ、本当にまた巻き込んで良かったのかな…？」

思わず本音が漏れる

(……………)

絶対無理だと思っていた

花火大会の日のように、全員が精一杯に走り回って夢を掴もうとした日々はもうって

けれど、また皆とこうして集まれた、こうして新たなチャレンジの門出に立つ事が出来た

夢中になって全員で作戦を考えたり、くだらないアイデアを出し

あつたり

一緒にご飯を食べながら笑ったり

ひよりの読んでいた本の槩を勝手にいじったり、灯にポニテを後ろから掴まれたり

それは何にも増して嬉しくて、がむしゃらに楽しくて

夏の匂いも感じれたり、今も充実感でいっぱい

でもだから……

ふと一人で落ち着くと、その隙間から現実的にどつと、‘もし’が湧いて押し寄せてきてしまう

「私はね……正直また負けることが怖い」

身体を丸めて、高一らしい胸の内を明かした

そして、灯はそれにいつもの口調とは変わって答えた

「この選択が正しかったのかなんて誰にも分からない、もしかしたら勝ち目はないかもしれない あたし達はただ自分達の首を絞めているだけかもしれない」

「……………」

「でもさ、だとしても、たとえこれが過ちだったとしても、あたしはこの道を皆で進みたいし、間違いだなんて一欠片も思っていない」

「…うん」

「上手く言えないけど、皆と一緒に信じた道を、この皆とこれでもかってくらい 最後の最後まで夢を目指してあがきたい」

「うん…」

そして、灯はしゃがむ私の頭をぐりぐりと撫でた

安心させるように地肌に熱を伝えてくれていた

良かった、話せて良かった

答えとかじゃなくて、気がつくと、胸の隙間はすっかりなくなっていた

「…でも、同じだよ、あたしだって、やっぱり怖い」

「…そっか」

ちよつとだけ、意外だった

そして、何だか、無性に嬉しくて安心した

「けどさ、そんなアンチがつくほどの壮大な夢を、あたしらは持つてんだよ？ それってさ、結構スゲー事なんだよ」

「敵ばかりだけどね」

「明日には味方もうんと増えてるけどな」

不安なんて笑い飛ばせてしまえる笑顔をお互い向けて、私達は眠らない夜を跨いだ

「それでもゆりがまだ心配するなら、あたしが勝算なんかいくらでも作ってやる」

「…うん、もう大丈夫、ありがとう灯」

「そっか、じゃあ寝ようか？ 明日からまた忙しくなるさよ」

「うん」

二人は幾分か晴れ晴れと、扉をそつと開けてテーブル席に戻った

「ねえ、灯？」

「なんさ？」

(……………)

「なんでもない」

「おう ……」

もぞもぞと座り心地をお尻で確かめながら、眠る二人の前で、こっそりとお互いの気持ちを声以外の仕草で伝えあった

(また救いに来てくれて、皆を集めてくれて、本当にありがとう)

灯は耳にヘッドホンをはめて眠った

また、後ろ髪はねじれていた

そして、私も長かった一日を終えた

足を投げ出して、心地よい意識を明日へと手放した

第7話

- 9月28日 - (日) - 1日目

眠った記憶もなく、いつも通りの新しい朝が世界に訪れた

差し込む白い光に目覚めると、透き通った空気と緩やかな木々のざわめきが耳元で流れていた

まどろむ意識でボーッと遠い瞬きをしていると

「お、やつと起きたさー？」

横に座っていた灯の音が左耳に届いた

「ゆりちゃんおはようございます、もう八時過ぎですよ」

続いたその声に合わせて、寝ぼけ顔で辺りを見回すと、私以外のメンバーはすでに朝の音を鳴らして動いていた

どうやら私が一番最後まで眠っていたらしい

きつと皆して気の緩んだ私の寝顔を見ていたんだと思うと、今更ながらに目を擦って前髪を触って直したりしてしまう

そして、その目覚めはサンタが来た朝のように
重大な結果発表の事をハツと思い出し、私は眠気を飛ばしてビクリツと起きた

「みどり団、みどり団はっ!？」

いきなり声を出したものだから、ろれつが回らず、なんとも間拔けな表情になってしまった

「そうですね、これはさすがに、予想外ですね、」

「え…?」

…だめだったのか

カチカチとパソコンをいじるひよりの言葉に一瞬の不安がよぎったけれどもその瞬間、そんな不安は上書きされた

隣の少女が栗色の寝癖を揺らして、口端をこれ以上にならないほどニッコリ上げてピースサインを私に向けていた

「ばっちりさよッ、」

反動をつけて、灯は私の想像とは真逆を言つてのけた

「めっちゃスゲーよっ、もう朝からひっきりなしぬー　ゆりもひよりの携帯とパソコン見てみ?」

その一声に完全に意識は冴え、そして視線を前に座るひよりに戻すと携帯の着信ランプが止まることなく光り、バイブレーションが一向に鳴き止む気配を見せずに

歓喜に湧いて机の上で跳ねていた

「こんなに、メールが」

席を立ち、ぐるっと回ってひよりのパソコンの画面も覗いてみるとそこには、続々と目を覚ました街の弱者達から、目まぐるしいスピードでメールが集結していた

「フォルダの容量がパンクしてしまいそうです 返信が追いつきません」

まさに予想外の嬉しい悲鳴だった

その間にも、まるでウィルスにでもはまったように、画面上には歯止めもなくメールが流れ込み、途切れず加速を続けていた

「本当に凄いね、何人集まるんだろう」

まだ朝の八時だというのにこのペースだ目の当たりにした光景に思わず胸が弾む

「にやう？ ゆり おはようなのですー」

「あ、有珠、おはよう」

見入っていると、奥から有珠と、これまた不機嫌そうな奏が顔を覗かせた

「有珠見た？ 凄いよっ、もう五十は軽く越えてるよっ」

「知ってるのです、寝てるゆりを灯がいじってたときから知ってる

のです」

「え!？」

思わず灯の顔を見返すと

無駄にニヤリと満足げな表情をしていた

.....

興奮も覚めやらぬ中、奏が木製のトレイを手にして、いつものように視線は合わせず言った

「.....先に、朝ご飯.....」

持ち手のついたトレイの上には焼き目のついた小麦色の食パンに、マグカップに注がれた紅茶が美味しそうな香りを漂わせていた

「そうですね、今日はこれから長い作業になりそうですし、ゆりちやんも起きたことですし、先にご飯にしましょうか」

そうして、私達はまた昨日の夜のように、木目の匂いのするテーブルを囲んだ

別荘にいるときのような肌触りよく湿った爽やかな朝、開け放たれた窓から青い風を部屋に招き入れる

トースターから食パンが焼けた音が鳴り、オレンジのジャムの香りがほのかにする

人数分のパンが焼き上がり、ゆったりした和の店内に朝食が揃い始める

白い丸皿をテーブルの上に五つ並べ、メイプルシロップにバター、果肉たっぷりのお手製ジャムが置かれる

準備中、私だけはキッチンの流し台に向かい、お水で顔を洗っていた濡らしたタオルでベタついた首もとや身体の油を拭き取る

それだけで気分は爽快になり、新しい真つ白のブラウスをカバンから取り出して腕に通した

ふと見た二の腕の蚊に刺された跡も、今だけは愛おしく感じた

「奏ー？ コーンフレークない？」

向こうでは灯の声と食器の音が響いていた

ポニーテールを解いて、ぺったりしていた髪もお湯で蒸らしたタオルで拭いて結い直す

そして、私もテーブル席に戻った

綺麗に並べられた食器の上には美味しそうに焦げ色のつけた太めのパンが置かれていた

全員が準備を済ませ、テーブル席に座り、一緒にいただきますをした

「……はい、ゆり……」
パンを手に持とうとしたときだった

奏からシヨボーンのマグカップが手渡される
中には柔らかなチョコ色のココアが淹れられていた

「ありがとう」
一口カップに口をつけると

(…おいしい)
生ぬるい甘さが起きたばかりの身体にすっと染み込んでいった

「有珠はイチゴジャムなんですっ」
たっぷり塗られたバターの上にサクサクと生地音を鳴らしてジャムが塗りたくられていく

「では私はメイプルにしますね」
嬉しそうに、ひよりは手元の紅茶に角砂糖を一つそつと落とした

それぞれにはむはむと頬張り、何気ない朝のヒトコマはくだらない
会話とともに進んでいった

「有珠ー？ グミ持ってたねー？」

「にやう？ あるですよ？」

なぜかコーンフレークに牛乳を注ぎながら、灯はグミの入った袋を
片手に受け取った

（グミ??）

そしてまさか、次の瞬間

牛乳と共にそれは躊躇なく中にボトボトと投入された

「灯!?!なにやってんの? さすがに食べ物で遊んじゃだめだよ
っ」

「おー? コーンフ레이크グミさよー?」

然も当たり前のように、そのままなんの抵抗もなくぱくぱく食べる灯

「うまいさよ?、一口食べるー?」

「い、いや…私はいい」

半ば引きぎみに、白い液に浮かぶ色とりどりのグミ

はつきり言つて罰ゲーム張りに不味そうだった

（灯って、もしか味覚音痴??）

冷蔵庫で冷やしていた焼きプリンを食べながら、有珠はぱちくりと
好奇の眼差しを向けて固まっていた

その脇では、先に食べ終わったひよりが慣れた手つきでお母さんの
ように果物ナイフで梨を剥いてくれていた

「もう本当に夏も終わりですね」

瑞々しい梨を一口かじると、しみじみと秋の味覚と夏の名残を口の中で感じた

それは少しだけ寂しくもさせて、充実した夏の思い出の延長にまだいる自分を嬉しくもさせた

味の合わないココアを飲み干して、カップの底に溜まっていた甘い部分を舌にゆっくりと溶かして、至福のときを実感した

太陽は昇り始め、窓からは青が強く見えていた

セミの鳴き声もなくした穏やかな陽気、濃くなってきた外の抹茶色の緑を眺めながら

私達は緩やかな朝食を終えた

第8話

テーブルの上の食器は全て片付けられ、代わりにパソコンと大きな
作戦用紙がスペースを占領していた

カチカチとキーボードを打つ音とB U M P O F C H I C K E N
のメロディが店内に大らかに響き

ひよりは傍らにコーヒーの入ったコップを相棒に、ヤフーメールに
送られてきたメールを一つ一つ丁寧に返信していた

私も携帯から、ひよりから教えてもらったログインパスワードでフ
ォルダを覗いていた
すでにメールの数は百件近くにのぼり

そこには賛否両論、一人一人の言葉が巡っていた

・何をするんですか？、集まる理由を教えてください

・ぜひ！！　なんかそういうのワクワクしますっ

・このサイトを作ってくれた人からのトピックなら、喜んで力にな
りますよ

・あなたは本当にリーダーなんでしょうか？、あなたを信じていい
のでしょうか？

・なんだかドラマみたいな大規模な事ですね、本当に集まれるのか
楽しみです

しかし中には

・くだらない、てかそれって警察沙汰になるよね？

・本当にやる気？、リスクとかはないの？

・すみません、ちょっと怖いので控えさせていただきます、ごめんなさい

・なんか楽観的で無鉄砲な気がする、皆ももう少しちゃんと考えたほうがいい

など、批判的な書き込みやいたずらに近いメールも少なくなかったそれはトピックのほうも同じで、たくさんのユーザーからのコメントが寄せられていた

・リーダーのピンチだ！参加するべきだ！

・ここは救済コミュニティだぞ？、俺たちが助けなくてどうするっ

・いや、でもだからって利用していいとは限らないんじゃない？

・そうだよ、こんなよくわからない事に協力して、もし事件がらみに繋がってて、警察にこのサイトが規制されでもしたらどうするの？

・我々はみどり団だぞ！、俺は何であれこのサイトを作ってくれたリーダーに恩がある、だから行く

・協力したいです…、でもこのサイトがなくなっちゃうのは悲しいし、本当に嫌です

・日時と集まる、とだけしか言われてないなら、多分リーダーから何かしらの返信がくるはずだよ、まずはそれを待って決めようよ

この街の高校生が夜を徹して真剣に協議を語り合っていた

冷静で最もな意見、とても全員一丸で集まってくれる雰囲気ではない…

「さて、これを一つの力に束ねれるかは、きっと今日のあたしらの頑張り次第さねー」

ひよりのパソコン画面の後ろに立って言う灯は、それでも湧いた逆境に楽しそうだった

「自覚させてやろうぜ どうせ俺が私がいたって何も変わらないじゃないかって思ってる奴こそが、この街を変えられる事を！」

「誰かがこんな臆病者のこいつらをまとめればいいんだ
今日の残り半日で、今から262人の意識変えてやろう、動き出す
きっかけを与えよう、」

相変わらず威勢のいい灯の声にあてられて、私達は携帯を握った

……

そうして作業を進めていたときだった

不意に、そこで一つの疑問が生まれた

例えば、昨日はツイッターや自分の携帯の作業で手一杯だったから見れなかったけれど

(…リーダーって)

一体、差出人を誰で送ったのか？

この皆はその誰の為に動いているのか？

不思議に思い、昨日ひよりの一斉送信したメールと奏の書き込んだトピックを携帯で読み返すと

(ユーザー名…みどり??)

ユーザー名、管理者：みどり

そう、今は眠る高三の創設者の名とカルマが、しっかりとここで受け継がれていたのだった

述べ262人の弱者をまとめる、絶対的トップリーダーの名だった

代理とはいえ、騙しているとしても、私達はその偉大な主の想いを抱いて使っていたのだ

‘繋がれた繋がり’なぜかそれを知った瞬間、携帯を握る手のひらに温かく込み上げたモノがあった

そして、私も作業に戻り、作戦を考える灯を除いて、他四人はパソコンと携帯からメールを一件ずつ丁寧に返信していった

違和感のないよう、何時間もかけて、皆それぞれ文章をひよりの言葉に近づけた

好奇心を与える言葉

現実を無視して動きたくなる衝動を与えるの言葉
ワクワクするような青春が目の前に迫る言葉

‘ 退屈なんてもつたいないぞ ’

青春映画を見た後の夏夜のうずきにも似た瞬発力だ

きつと一ヶ月前の私なら迷って、でも行ってみたって思う、抑えきれないほど強い言葉で返信メールは溢れていた

‘ 何十年と続く そのたった一瞬の夏の終わりだけ、世界を変えてみたいんだ！ ’

‘ 総動員で夏のいたずらをしたいんだ！ ’

戸惑う心を揺らして、掴めるその先262人を四人は誘いに行った

.....

朝から同じ体勢で座り、お昼も過ぎた頃だった

ふと、いかにも悩んで作戦を考えていた灯が店内に声を発した

「ねえ、みどり団を更にまとめあげる方法だけど」

「何か思いついたの？」

灯は作戦の他にみどり団を一つにする方法も考えていた

「めっちゃ簡単さけど、何かの団体にはロゴマークが、団員にはト
レンドマークが、やっぱり重要だと思うんさよね」

「マークにやう??」

灯が口にした事

共通の証、共有の印、同じ志を掲げる旗

単純で子供騙しではあるけど、それは人が多ければ多いほどチーム
ワークと団結力を上げる

まとめるには確かに悪くない方法だった

国の悪に立ち向かうヒーローや、正義の旗を掲げた最強のチーム

秘密基地や自由帳に書いたマークや、同じ物を友達と揃えて楽しか
った小学生のときのように

大人になっても、私達は少なからず心のどこかでそれに憧れてしま
う生き物なのだ

恐らくメールとトピックを読んで考えたのだろっ、なんとも灯らし
いユニークな案だった

「確かに、なんだか制服以外にも一つになるチームの象徴的なマークが欲しいのです、みどり団らしい」

「でしたら、これなんてどうでしょう？」

一人黙々と作業を進めていたひよりが手を止めて、周りの三人に提案した

灯がぬぬーっと近づき、有珠と私も指された画面を見た

目を凝らしたそこには、サイトの象徴とも言える、掲げられた三つ葉マークがあった

（みどり団のサイトの…だっけ？）

「ッ！ ひより冴えてるなっ」

唐突に、前触れなく灯が悟ったようにひよりの意図を感じいた

「はい、そういう事です」

「え？何が？ 灯どうということ??」

「ほにゃあーっ 有珠には全くよくわからないのです また仲間外れなのですっ」

灯とひよりは、また二人だけ秘密な、意地悪な表情をして

「だからなあ、つまり」

もったいぶらせて、灯はカウンターの奥にいた奏に手招きをした

「…?…なに?…」

趣旨が分からず眠たそうなジト目を向けて、奏がとぼとぼ歩いてくる

「この三つ葉マークだけど」

‘五つ葉’にしちゃダメか?

(…え)

その言葉が響いた瞬間

「ッ」

ようやく全員が理解する

ここにいる selling day のメンバーの数の葉数

少しだけベタで恥ずかしくもある、でも誇らしい高校生のマークだ

selling day x みどり団のプロローグを告げる新しい旗

「……………」

奏は少しだけ考え込み、姉の残したシンボルマークをじつと、じつと眺めていた

今まで一人で守ってきたそのマークを、五つに分けた葉が共有するという事に

今まで一人で守らざるを得なかったそのマークで、仲間と共に強敵と戦うという事に

「……………」

そして

「……………いいよ」

何かに踏ん切りをつけるように、奏は深く頷いて了承した

なぜかその顔は、少しだけ晴れ晴れとしていて、少しだけ寂しそうでもあった

「…奏」

残されたたった一人の妹の視線は、いつまでも三つ葉に注がれていたのだった

さすがはひよりだ

ほんの数分とかからず新しいマークがサイトに掲げられた

実際のところ、これだけやってもみどり団メンバーの意識がどう変わったのかは分からない

けれども、主犯五人の意識は大きく変わった

ここに集った弱小の少女達は

隠蔽に汚れきった世界の中心に杭を突き刺して、五つ葉を掲げたみ

どり団に、みどりさんに勝利を誓ったのだ

.....

それから夕方過ぎまで返信作業を続け

メールの受信もまばらになった頃、ようやく大体の作業を終えた

これで皆はどう判断したのか

けれども、一人一人に送った確かな文章に誠意は伝えられたと信じていた

やれるだけの事はした、満足にも近い達成感だった

返信やトピックのコメントはどうなるだろう

その結果を目の当たりにするのは決戦の日、当日だ

「...ふう 疲れた」

身体力を抜き、勢いよくイスにもたれかかり、一日にらめっこをしていた携帯を閉じた

首をガクンと後ろに垂らして、前髪も後ろにさらりと落ちて窓から空を見上げると

辺りはすっかり薄暗く、身体熱を覚ますひんやりとした心地いい風が吹いていた

作業に終えた五人全員には、努力の結晶のように

その人差し指には豆が出来かけていた

その後、私達は約二日ぶりにお風呂に入った

喫茶店を空にして、坂を下り、川沿いを進み、その場所を目指した駅のはずれにある団地地区の間にある小さな年季の入った銭湯だった

皆楽しげな足取りの中、灯だけは、どこか終始行き詰まったような表情でぼーっとしていた

思えば、今日一日かけて灯が書いていた作戦用紙は、昨日からまるで書き足されていなかった

銭湯に入っていた間、近くのコインランドリーでブラウスや下着を洗った

お風呂あがりの生乾きの髪を涼しい夜風に流しながら、喫茶店に帰り奏コックさんと一緒に作った具たくさんカレーを皆で食べて

私達は、明日からまた始まる停学明けの学校の準備をして眠った

.....

三日間の内の一日が、あつという間に終わってしまった

これで何か変わったのだろうか

ハルを助ける手段へ、桐島さんと対峙する方向へ

たった五人の女子高生は、本当に近づいているのだろうか？

明確な変化や兆しも見えぬまま、作戦も定まらぬまま

タイムリミットは刻々と迫っていった

第9話

同時刻 - 聖蹟桜ヶ丘男子高校 - 屋上 -

日曜日の夜はひととき寂しい、明日から週が始まると思うと、こんな年になってもため息が出るときがある

あの頃とは違い、希望も夢もなく、やけに現実的な空に視界はゆっくりと弧を描き

年月を重ねて久しぶりに立った屋上は、いつの間にかこんなにも狭く感じるようになったのだろうとしんみり思う

もう一ヶ月ほどになる、斬られた腕はまだ包帯が巻かれたまま、僅かに治りかけの傷口が痛む

「さて、どうしたもんかな」

ただそんなわけでも、あれよりは随分短くなった前髪と輪郭を流す屋上の風は、あの日と変わらないままなわけで

「逸希が終わらせると決めたなら…」

腕っぷしを後ろに倒すと、か細い金網は体重の重みできしりと鳴き、頼りなく揺れた

今ここには、十年も前に卒業した三人の大人がいる

天文部に青春の全てをかけ、大嫌いな大人の仲間入りを無事に果た

した背広姿の三人だ

不在の逸希を除いたその三人、あの頃の逸希風に言うならば

どこにでもいそうな冴えない顔の 五十嵐 日向

茶色の髪に前髪をヘアピンで止めた背の高い 羽鳥 康介

真面目そうな面に黒ぶち眼鏡にさらさらの髪の中島 京

今に言うならば

どこにでもいそうな、ひょろいサラリーマン姿の 五十嵐 日向

後ろ姿はモルモットのような茶髪をした、ネクタイピンの似合う

羽鳥 康介

真面目な社会人そのままに、細い眼鏡にさっぱり切り整えられた髪
の 中島 京

私の名前はその一番上だ

「もうここも十年以上前かあ…、まったく早えよなあ」

それぞれなんとも言えない距離を保ち、金網を鳴らして、まったく
嫌なほど落ち着く景色と空を懐かしんでいた

そして十年の歳月の変化を悲しく感じていた

「まあ色々あったしな…それぞれ」

あれから経った、本当に…残酷なほどに経った

今より一回り小さな身体で、四人は夢心地になってここから天体望遠鏡をかざしていた

(……………)

けれども、同じ場所から見たあの広大な星空は、見上げてもうどこにもない

あるのはヒステリーを起こす月、あるいは雲に覆われた夜、作りかけの街との煙がかったモノクロの霞み色だけだった

こんな狭い場所で何か凄いモノで溢れて走り回っていた制服姿の少年達は、立派に三十歳になり

…色んな角度から社会を知り、それなりに夢にも敗れ、経験し

そして一端に汚れ、三人は通り魔に腕を斬りつけられた

「はあ…たくよ、こんな大人にだけはなりたくなかったよなあ」
ぼやいた康介の茶髪が冷たい風に揺れる

「一年もお袋さんに隠し続けてきたのに、せつかくあと一歩なのに、本当に今なのか、全部終わらせるのは」

「それでも逸希は決着をつける事にしたんだろう、このメール」は
そういう意味だろう」

京が眼鏡を力チャリと中指で掛け直す

「けどよ…下手したらあいつは死ぬ事になるんだぞ
俺にはどうも納得出来ねえ、あいつが仕方なく、追い詰められて残
された選択がこれしかねえから、だからしょうがなくもう終わらせ
るって、つまりはそういう理由での決着だろ」

「まあ…元から所詮私達人殺しの事情など、家族を殺された者にと
っては償いを猶予する理由になどなるはずがないのだからな

自業自得、罪があるのは全てこっちなだから、待ってくれなど言
えるはずもない」

取り乱す事もなく、ただただ白けた空気が血管の浮き出た腕を冷や
し、金網にかけた指をじんとさせて

夕飯時の街の音が遠くぼんやりと響いていた

「はあ、決着かあ、逸希は、逸希の嫁さんと娘は、…なによりお袋
さんは、どうなっちまうんだろうな」

「逮捕だろう、もちろん私達三人も 残り数日後には」

あとは時間が経てば、隠蔽された轢き逃げ事件も
奇っ怪なウィッチの連続通り魔事件も
そして斬られた被害者の謎も

警察とマスコミがきれいさっぱり解決するだろう
議員が幼い子を轢き殺した大スcoopだ…

「あいつが一年かけて決めた以上、私達が今更出来る事はもうない

のだろう」

言い終わり、スーツの胸ポケットからタバコを取り出して、京は口にくわえた

吹かした軽い煙は、ヤニ臭く街のほうへと物寂しくたそがれていた

「タバコ、やめたんじゃないのか」

「……色々、吸いたくなるときがあつてな」

「……そうか」

（……だろうな）

ほんの前だ、逸希が三人にメールを送ってきたのは

決着をつけるという素っ気ない文脈の内容だった

けれども最後に付け加えられていたのだ

その決着の代償に、お袋さんが息を引き取るその瞬間までは事実を隠し通したいと

その苦渋の決断に至った理由は、ある五人の少女との出会いだったらしい

不運にもこの事件に巻き込まれた、私達の十年前にはあつたでだろうモノを今も持っている別の被害者達だった

責任、という逸希の言葉に、私はそれだけ聞いて納得した

だから当日、あのウィッチの少年がたどり着けたときは罪を認め
もし来れなかった場合は、母の残り僅かな命の最後まで罪を隠す
などと、終止符を打つ決心をしたのだ

そんなわけで、共犯の私達三人が出来る事は、虚しくももうないわけで
ただどっちにしても、最後には天文部は捕まってしまうのだ

今更大きな悔いはない、一年前に罪を償わなくてはいけなかった人
生なのだから

これだけ遠回りもした、もう三人は十分だ

ただ、一つ欲を言えるのなら

もう一度だけ、もう一度だけ…

何も知らなかったあの頃の夏に帰って、ここで望遠鏡を囲んで
天体観測をしたかったなあ

立ち込める空を見上げて

なぜか、頭の中では翼を下さいのメロディが寂しく高く流れていた

………

あの頃ならなんでこんな高いもんを感じていたであろう120円
の缶コーヒーを、私は飲み口を噛んで飲んだ

「なあ 日向、京 一つだけ ちよつといいか」

何をするわけでもない、終わりの前の思い出に浸っていたときだった

ちよつと気になるものを見つけて、と康介がポケットから携帯を取り出した

「……………」

「どうした？」

何年前の機種だろう、傷が目立つ薄型の携帯を康介は開いた

「もしかすると、あの女の子達」の仕業かもしれないと思う節があったんだが」

歯切れの悪い口調で言い、康介は携帯の画面を見せた

すっかり暗くなった街並みを背に、二人がコツコツと靴を鳴らして行くと

「……………」みどり団？？」

「SNSサイトってやつか、懐かしいな」

画面はウェブサイトに繋がれていた

珍しい「五つ葉のマーク」が描かれていた

「多摩地区の高校生専用の小さなSNSだが、つい最近 気になるトピックがトツプらしき人物から送られてきたらしい」

「それがどうしたんだ？ どうせオフ会とかだろう」

「いや、書かれていたトピックの内容は、登録したユーザー全てに向けて、十月一日に集まらないか」という内容のものだった」

（決着の日か…）

「仮にもサイトのリーダーの書き込みだぞ
それにこれは登録者しか閲覧が出来ないようになっていて
…俺
にはどうも上手く出来すぎているようにしか思えない

どうしても、当日に邪魔をしに行くから皆協力してくれと、書き込まれているように見えちまうんだよ」

「さすがにそれだけで決めつけるのは早いだろう
ただ確かに、これが本当たしたら、可能性がないわけではないな
高校生という点も引つ掛かる」

携帯に表示されたサイトを見つめ、冷静に京も相づちを打った

「……………」

先にも言った、私達はもう出来ることはないのだと

しかし、逸希不在のこの街であの少女達がまだ諦めずに戦おうとしているのならば

仲介をしようというのならば

それは話は大きく変わってくる

逸希の、せめてもの最後の願いだけは成し遂げさせたい

それが捕まる私達の望みなのだ
それが、死ぬかもしれない事を百も承知の上で導き出した逸希の決断なのだ

出来ることならやりたくない、けれども不安要素があるならば阻止しなければならない

「どれか一つを手になれば どれか一つを必ず壊す」

悲しくも、それがこの街の仕組みなのだから……

共犯者という理由ではなく、仲間だからやるんだ

「少し、調べておこうか」

……

そして、私達は懐かしい夕闇の屋上を後にした

ほか弁と歯みがき粉を駅前で買い
近々連絡を入れる、とだけ言葉を交わし

それぞれ夜の聖蹟桜ヶ丘で散開した

第10話

- 9月29日 - (月) - 2日目

快晴な日差しと秋晴れの週始め

今にもトランペットの音色と小鳥のさえずりが聞こえてきそうな新鮮な通学路

「ていうか、なんで誰も目覚ましセットしてないのっ!!?」

早朝から、女子高生五人はいろは坂をダッシュで駆け下りていた

髪をぐしゃぐしゃに、肩のカバンを跳ね飛ばせ

街一番にそびえる丘から一望する開けた世界と平行して走っていた

相変わらず私達の非日常は、停学明けだろうと、初っぱなからそんな常識はずれのドタバタ劇で始まったわけで

.....

きっかけはつい先ほど、一番先に起きた私が眠気まなこで携帯電話を開いたときからだ

紅茶葉の香りのする店内で、眠気も抜けきれない頭で、画面のデジタル時計に閉じかけの重い瞳を向ける

気分的には、すでに起きていなくてはならない七時頃を差している
と思い

あくびと共に少しだけじんじんするお尻を上げようとした、ときだ
った

(……………あれ)

重大な異変のズレに気がつく、タイムスリップをしてしまったと思
うほどすっからかんに飛んだ一時間の時刻に

(……………)

いいほうじゃなくて悪いほうで

合わない焦点で見る、見直す、二度見三度見する

見返すたびにしっかりとくつきり現状を理解する

(……………最悪だ)

その瞬間、頭の血がスーッと引き、たちまちまぶたが冷水でこじ開
けられるより強烈な現実を目を覚ます

そう、疾うに玄関を出ているはずの、八時ピッタリ、に時計は刻ま
れていたのだった

「……………！？、八時！？ッ」

一人大声を張り上げて飛び起きる、けれども時刻は変わることなく
進んでいく

今から走ってもここから学校までは最低三十分はかかるのだ

這い出して、太ももを無防備に露にしてテーブルにぺったり眠る灯りの肩を擦る

「灯っ！ 起きて やばい、遅刻だよっ！」

「うぬ…灯さんは本望だ…」

「いや、寝ぼけてる場合じゃなくて！ ほんとに早く起きてッ」

灯の身体を強く揺さぶると、むくりと上がった頭が、まるで赤ちゃんのようにふにゃふにゃと前後に揺れる

ふと、テーブルのほうを見ると、落書き数個と白紙のノートが置かれ、端が覆い被さった灯の身体のせいで折れていた

それは確か、昨日皆と寝たときにはなかったものだった

「ひよりっ、有珠っ、それから奏もっ 皆もう八時だよ！」

呑気な眠気が浮かぶ店内にピシリと緊急事態の音がサイレンの如く響く

それはそうだ、私達にはただの遅刻じゃない

仮にも私達は謹慎を受けた問題児、その停学明けだ

登校初日で遅刻なんてしたらそれこそ先生にこっぴどく何を言われるか分からない

しかも揃いも揃って五人全員が遅刻だなんて、前科のある私達が怪

しまれないほうが不自然だ

そして、私達は朝から騒がしく店内を走り回った

ただ唯一、制服を着ていた事だけは救いだった

朝ごはんも食べずに軽いカバンだけを握りしめて、ついでに誰かに足も踏まれて

ローファアを履き潰して

私達は何かに追われるように、前のめりに勢いよく喫茶店の扉を開いた

「ていうか、なんで誰も目覚ましセットしてないの?!?!?」

「知らないさよ! 灯様の性格知ってるだろーっ もうー」

そして、今はこうして揃って下り坂を疾走している

スピードに流れる雑木林の木漏れ日から見えた空には、薄い雲が高く浮かび、まるでゆったりと地上とは別の時を泳いでいるように見えた

宅配物を乗せたバイクが走る私達の脇を軽やかに通過していく

「はあはあッ、あたしはてつきり他の誰かがセツトしてると思ってたのにーっ 見損なつたぞお前ら」

「ほにゃー、有珠はひよりがしてると確信してたのですー」

「皆さんすみません、私は喫茶店の奏ちゃんか、ゆりちゃんがやっていると思っていました」

若い空気の漂う朝っぱらから汗を飛ばして、昇り始めた太陽を追い越していく

土に溜まった夜の水分と根っこの香りが鼻筋を涼しげに冷やした

けれどもなんだか、停学明けに全員遅刻のピンチにも関わらないはずなのに

待ちに待った新学期の朝にも似て、動き始めた街と共に不思議なほど心はワクワクと浮かれていた

「って！？奏！？、ちゃんと走ってよー」

「……む…ボクは走りたくない…」

ふと見ると、一人後ろでとぼとぼと奏が歩いていて
夜以外に動く奏の姿は何だか見慣れない光景だった

「……………」

黒のベストを羽織り、相変わらずの仏頂面に長いスカートを垂らして、青白い肌とは真逆の真っ黒のジト目を向けていた

それからというものの、どうにか奏を前へ走らせる努力をした

しかし疲れるたびにブツブツと

「……ボクを怒らせると……二千を越す軍勢が黙って……」だとか

「……もう……ボクはいい……構わず先に……」だとか

走りたくないのか口数の少ない奏が最後まで厨二的抵抗をしていた
そのたびに灯や有珠がなんとか走らせようと言葉や物で釣って奮起
した

裏道を使い、路地の抜け道を掻い潜り

そしてようやく、朝のホームルームのチャイムと同時に学校の門の
前にたどり着いた

校舎の窓はすでに開かれ、白いカーテンがパタパタと揺れているの
が見えた

「はあはあ、着いた……ッ」

アクエリアスが欲しい汗の量、けれども夏とは違った気持ちのいい
爽やかな汗だった

休日みたく誰もいないひっそり静かな生徒玄関で、目にも止まらぬ
スピードで靴を履き替え

朝日が射し込む階段に足音を鳴らしてそれぞれの教室を目指した

そして奇跡的に、先生が来る二分前に私と灯は窓辺の席に着いたのだった

息を切らして、机の上にぺったんこのカバンを投げる

他の生徒はほぼ全員座っていただけに、かなりに浮いてしまった

そしてそれ以前に、一週間も欠席していた二人にはひそひそと白い目が向けられていた

「…ねえ、なんなの　なんであの子達揃って休んでたの？」

「なんか噂だと警察に関わるような事して停学だったらしいよ…」

「つか普通にウザい、いつそ退学かそのままヒッキーになってくれたほうが楽だったのに」

「別にどうでもいい、はあ、今日真剣に眠い…」

ここに座ると自分たちの現在地がよくわかる

群れの中で、筋書き通りにけなされている感じだ

（…まあ、しょうがないよね）

口の中が苦い唾で溢れて、身体が縮む感覚を覚える

よくはない、居心地も良いとは言いがたいけど

今はいい、これでいい

この全ては私が選んだ道だ

負けたわけじゃない、逃げたわけじゃない、目を背けたわけじゃない
勝つために選んだんだ

その日常を捨てた代償のつけはきっかりここに溢れている

その日常を捨てた成果もきっかりここに溢れている

主導権はそちらでいい、どうぞ好きなだけ梓の後ろで批判して笑い
飛ばして下さい

ただそんなもんでぶれるほど、私達の軸はもう弱くないから

こんな私達にしか変えられないものもあるんだ

全で一瞬で失うリスクと隣り合わせで、私達はこれっぽっちの余力
も残さず叶えようとしているんだ

一ヶ月前、打ちのめさせる事が怖くて裏に隠れていた小心者を捨て
て、今は素の自分で真っ直ぐ勝負して傷ついている

馬鹿なほど微塵も疑わない、きっと出来ると自分たちの可能性を信
じきっている

それが何にも増して、例え現在地に座っても揺るがない事を誇りに
思った

(……………)

黒髪に流行りの髪型、中には夏休み中に茶色に染めて直したのか、黒が抜けて薄く茶色がかっていたりポケットからは携帯に付けた大きなディズニーのキーホルダーが垂れている人もいたりする

(……………)

ねえ知ってる？、そこにいる限りね

いつまでも‘順番’は回ってこないんだよ

- お昼休み - 屋上 -

凜と澄んだ昼下がりの空、さりげなく浮かぶ白い月が思わず眠気を誘う

「秋なのじゃー」

「秋ですねー」

複雑な街のうねりや巨大すぎる戦場は今はどこへやら、縁側か畳があつたら横になりたくなる昼休み

地べたにちょこんとハンカチを敷いて、私達は腰を下ろしてお昼ご飯を食べていた

「にゃあ、部室が使えないのはやっぱり痛手なんです」

「そうだね、でもさすがに無断で使って見つかったら次はないもんね」

フェンスにもたれかかり、ストローをくわえたまま空を見上げる

背の校庭のほうからはバレーをする生徒の音が響き、校舎には校内放送が流れている

他の生徒がいる教室や廊下で食べれるはずもなく

私達は花火大会以降いつそう肩身が狭くなってしまった

部室だった教室は固く鍵がかかり、最終的に生徒のいない屋上に追いやられた

それでも、それぞれにコンビニで買ったパンをかじり、飲み物を含んで笑みを転がしていた

「あか……り？」

ただ一人、その策士だけを除いては

(…灯??)

朝からヘッドホンで耳を塞ぎ、完全に雑音を遮断していた灯は

今の私の声にすら応答のない、そして今までに見たことのないような浮かない顔をしていた

食べられた形跡のない大好物のパンを片手に、空白のノートをまる

で新聞紙でも読むかのような渋い顔つきで睨んでいた

端の折れた、朝に見たあのノートだった

思えば今日の四限、いや…昨日の夜からずっとだ

灯は自分から話しかけてはこなかった

終始ノートに向かつて、作戦を考えていた

多分、今日の寝坊の原因は灯だけは仕方なかったんだ

だってなぜなら、昨日の夜、皆が寝静まった後で

灯だけがたった一人徹夜をして、人知れずずっと作戦を考えていたのだから

ただそれも、これほどの時間を費やしても、具体的な作戦はただの
一ページも進むことはなく、折れ目のページから進めないままだった

考えられたほとんどの文字はボールペンの黒でぐちゃぐちゃに塗り
潰されていた

「…くそ……」

誰から見ても、灯は間違いなく行き詰まっていた

タイムリミットは明日まで、もう明日だ

いつもなら、あのひらめきで灯らしい逆転の作戦をバンツと思いつくはずなのに

初めて突き当たった‘スランプ’まさしくそういう目だった……

「ひより またメールチェックしてるですか？」
さっきコンビニで買ったジャンプを脇に置いて、ひよりはまた携帯でヤフーメールを確認していた

「はい、新しい人からのメールは出来るだけ返信したいですからね」

「そうですねー、有珠もみどり団をまとめるトレンドマークとか何か思いつかないとです！」

そう言いながら、有珠は携帯で当日の天気予報を確認している

皆、後は灯の作戦待ちだった

今までどんなピンチも救ってきた百戦錬磨のリーダーを信じて、誰も疑ってなどいなかった

（……灯……）

本当に、間に合うのだろうか

例えみどり団が使えても、例え五人の欠けてしまった能力を駆使しても

どこにいるのかも分からないハルの殺意を取り除き、更には警察とグルの桐島さんの元へ無事に導き対面させる事は

それだけじゃない、それ以前に有珠の言ったように、あと一押しで団結出来そうなみどり団の山積した問題だってある

「…ねえ、灯　大丈夫？」

いつも中心いた元気な女の子は、少しだけ輪からずれていて

迷ったけれど、私は添うように声をかけた

「な、なはは…っ、ゆりくんなんて顔をしてるんだいつ、大丈夫さ
よっ　なにがなんでも今夜までには作戦完成させるから」

「……………」

なんて顔をしてるんだ、それはこっちのセリフなのに

私の気持ちを悟ったように、根拠のない空元気の笑みを灯は向けた
心配させないように笑ってた、細い眉毛は、ひどく垂れ下がったま
まで

いつもの灯じゃないのはすぐに見てわかった

きっとリーダーが初めてぶつかった、迫られた重圧、プレッシャー

「…ねえ　灯」

「ホント…わりい、絶対なんとかするから…っ　絶対」

隙間だらけのしよぼけた声を呟いて、灯は避けるように視線を逸ら
した

(……灯)

このままじゃ、灯だけじゃきつと、これは乗り越えられない…

今回ばかりは、とても一人じゃ勝てない、どれほど困難で難解な問題かを灯自身が何より痛感している、そう確信した

こんなとき、仲間が困っているとき、灯、ならどうしてた？

難題を独り抱えたくせに、元気に振る舞っちゃう不器用な本人に、どうする？

力を失った私になら、何ができる？

作戦のアイディア？

だめだ、何にも思いつかない

励まし？応援？

今の灯にはそんなもの邪魔なだけだ

(……………違う、灯なら)

影の優しさなら、こつするッ

「ねえ、灯」

「……？なんさ」

「折衷的共有案」

欠けた能力を一つのアイディアに凝縮させる

初めて、作戦を、全員で、完成させるんだ

今度は私達が、灯をサポートするんだ

「皆と 図書館に行こうっ」

私は、裏返った声で強くそう言い放った

第11話

放課後、ヒビの入った灰色の校舎は西日を受け、部活動の生徒だけの声が佇む風景に静かに流れていた

生徒の消えた廊下は冷たく、窓ガラスから踊り場にまで伸びたオレンジ色がどこか物寂しげに辺りに影を作っていた

そんな景色とは真逆に、五人は真つ直ぐ足音を響かせて、立ち並ぶ教室を走り抜けて衝動を放っていた

階段を飛び越えて、暗い生徒玄関でローファアのかかとを踏み潰し、焦げ色のちぎれ雲の下、香りたつ広いグラウンドを駆け

そして図書館へ続く駅前の雑踏を進んでいった

あの後屋上でひよりに話すと、ずっと立ち上がり、一つの間も開けず、然も当たり前のように胸の底から出した息で受け止めてくれた
むしろ喜んで微笑み、瞳にかかった前髪を揺らして、そして包み込んでくれた

「灯ちゃんにはいつも助けていただきましたからね

全員の知恵を絞ってでも、必ず今日中に考え出してみせましょう」

そう言つて、ひよりはぶかぶかのカーディガンからちょこんと出した指先を胸元に当てて、キュツと握りこぶしを作ってみせた

頼もしく、続く青空の下で純白の有珠と夜色の奏も頷いた

もう後のない、危機感を滲ませながら刻々と終わりに進む世界

夜へと残された僅かな一日は、穏やかだった日中を塗り潰すかのよう
に、乗っ取った墨色を街や電柱に蓄えていく

傾く夕日を背に受けて、行き詰まった夢の中、闇に閉ざされた最後の
答えを目指して

お昼休みに叫んだ私の言葉通りに、この街の知識が集結する図書館
に大きな期待を抱いて、並木通りから駅へと歩いていった

加速する支配された夜に反抗して進んでいると、それだけでなんだ
か無性にワクワクしてくる

必ず何かを呼び起こして、こんな街を変えてみせるんだ

絶対的エースのピンチを、今度は私達が支えてみせるんだ

ブレーキなんかぶっ壊して、風を切って丘からスニーカーで飛び降
りたい

‘何かを掴める’そんな気分になれるんだ

けれども、ただその中心にいる張本人だけは…

「…ごめん あたしが出来る事はこれだけだったのに、キャプテンなのに、あたしの力不足で…」

未だに完全には乗り気になれず、まだ重い重力を背負っていた

「気にしないで下さい、信じて下さい もう一人で考え込まなくてもいいんですから

ただほんのちよっぴりだけお願いします、私達に途中までのアイデアを預けて下さい その代わりに、完成させますから」

「でも…、あたしの唯一の役割なのに、責任だったのに…」

灯はこのチームをずっと先頭で支えてきたリーダーだからこそその後ろめたい気持ちを滲ませていた

一番大事な局面を果たせなかった才能が、頑なに負の荷物となって引きずってしまっていたのだ

「大丈夫だよ、大丈夫、心配ない、僕たちがついてるじゃんか
絶対、僕たちで灯の続きを作ってみせる 今度は僕たちが頑張る番だ」

「……ボクも……」

出来なかった事に落ち込む灯の背を押して、有珠は僕に、四枚の欠けた能力は、個々に力を高めていった

それぞれに磨り減った能力を補う為に、私達は二人で一つ、それでも挫けるなら五つで一つの能力を掲げるのだ

「 作ろうよ、私達の最後の夢を」

「…ごめん、本当にごめん… 肝心なときに、こんな最後の最後で力不足で…っ」

初めて、灯が一人で出来なかった

進む為にその唯一無敵の取り柄を譲る、今まで努めてきた立派なポジションを皆の望みの為に閉じる

ある種の敗北感、挫折感

……積み荷を下ろす

それがどんなに苦しかったか、悔しく情けない事か

そうして促され、肩を並べたリーダーの表情は複雑に、少しだけ涙を浮かべていた

「悪い… あたしだけじゃだめだった…っ だから、だからこれから一緒に作ってくれ…ッ」

辛く灯は、勝つために能力を託して、支え続けてきた自分の世代を移すように泣いた

一生に一度味わうことが出来るかも分からない夢を、再挑戦する為に、泣いた

- 関戸図書館 -

市役所のような整備された明るい階段を上り、私達は駅近くのショッピングビルの二階に入った図書館に来た

自動ドアが開くと、しんと静まり返った落ち着いた弱冷房の空間が広がり、私達より先に高校生や大学生が学習机を埋めていた

本棚は奥までびっしり並び、それぞれ細かくジャンル分けされていた

この閉ざされた幾つもの本の中に、必ず最後のパズルのヒントが眠っている

立ち構えると、プラスに持っていける期待感が膨らみ、たちまち鼓動を早めた

現時刻は五時前、ここの閉館時間は八時

その三時間までに必ず何かを得てみせる

勝つために個々のスキルアップを誓い、必ず最後にはやり遂げてみせる

なんてことない、もう一度始めたあの夜から覚悟していた逆境だ、ちょうどいいハンデだ

「じゃあ、さっそくやろうか」

学習スペースに適当に空いていた六席の長い勉強机に座り

それぞれにカバンからノートやペンケースを取り出す、捲っていたブラウスの袖口を更にぐっとたくしあげた

そして、本を探しに図書館の各所に散る

制服に身を包んだ周りの男子生徒達は耳にイヤホンをはめ、スラストラとペンを走らせ、本とノートとを交互に目線に移していた

たまにこちらに視線を移しているのも分かったけれど、私達は気にせず作業に取りかかった

古びた木の匂いのする棚に歩きながら目をやり、頭上高くまでびっしりそびえる本に思わず眉を寄せてしまう

有珠は、三脚を跨いで埃を巻き上げて音楽知識や変装の本を取っていた

ひよりは地道に歴史的な革命が綴られた書物やパソコン知識

奏は入り口に設置されたパソコンで館内にある本を検索していた

灯は白色のヘッドホンを目にしたまま、サスペンスやトリック小説やミステリー小説を積んで持ってきた

私は、手当たり次第使えそうな犯罪の手口が書かれた資料本や、一番太い聖蹟桜ヶ丘駅周辺の地図の持ってきた

受け皿のようにした両手の上に重い本を乗せては運び、あつという間に細長い机の上は厚い本だらけになった

「ところで灯？ 具体的に作戦はどんな感じに出来てるの？」

うんと頷き、音漏れするヘッドホンを外して、灯は開いたノートを手から手放した

そこには、当日にクリアしなくてはならない課題が一番上に書かれ下には使えそうなツール

つまりはみどり団に、今までの作戦で培われた経験や

灯の行動力と瞬発的な発想力

ひよりのウィザード

有珠のスイミーとギター

奏のネットワーク

しかし皆の能力を最大限に使う作戦のシナリオは、そこからは空白だった

「ゆりでもだめだった、一夜でハルの殺意を取り除く方法がどうしてもあたしには分かんないんさよ」

「まずはそれを今から皆で探しましょう」

一つずつ課題をクリアする為に、私達はアイディアと方法を手探りに探して本を読み更けた

めぼしいものは自分たちのノートに一つ残さずびっしり書き止め、また本を読んでは、別の本を棚から引っ張り出す作業を続けた

あっという間に時間は過ぎ、もう七時を回った頃

空も更け、空席も多くなった学習フロアで、人一倍様になって読み更けていたひよりがうんつと伸びをした背骨をポキッと鳴らした合図と同時に

「そろそろ使えそうなアイデアを一つにまとめましょうか」

情報収集は、そこで一旦取り止めになった

そして、ついに灯のノートに女子高生五人の知識を絞った大作戦が一つの形に育て上げられていく

第12話

寄せあつたノートに目を通し、数々の単語を見て協議する

ひよりは押収されたウィザードを諦めず、尚も底上げする方法や

有珠は素性の見つかったスイミーをどうにか使えないか調べていた
奏はなぜか塗料やアートの教本

しかし全員が共通して読んでいたものは、大小革命的変革を記した
本だった

「ひよりはウィザードは使えるんさ？」

全員でノートに書かれたあの手この手を囲みながら、その中心に座
る灯が口を開いた

「明日中に新しいUSBカードに即席で最低限組み込みます

ですが、前のように一年かけて作り上げたウィザードのようにはさ
すがに使えません

恐らく街の停電等の大きな事は不可能です、きっと見つかつてもし
まいます

それでも、なんとか少しくらいは使えるくらいにはしてみせます」

「じゃあ、具体的に監視カメラを止めたり、パソコンを覗く事くら
いは??？」

「場所にもありますが、民間の場所で短い時間なら可能だと思います」

「わかった、アリガト」

すると、灯は自分の前に置かれた、あの作戦ノートに新しいツールとして書き込んだ

「有珠？ まだスイミーと、それからギターは弾ける？」

「スイミーはこのままじゃ使えないですけど、変装の本を読んで、逆転の発想」で思いつきましたです
見つかった、皆とは違うこの見た目の有珠だから出来る、一度きりのもう一つ新しいスタイルのスイミーがありますです」

出会ったところの人前に出るのが怖かった、どこか病んでいた弱々しい幼い女の子はすっかり消え
揺るぎない自信を見せて、有珠は嬉しそうに笑ってみせた

「ギターは、どこでも弾けるですよ むしろ弾けるなら、路上ライブしたいくらいなのです」

すると、思わず灯の唇の端がニヤリと引き上がった

リーダーのノートが彩りを増し、止まっていた何かが動き始める

「なあ奏、明後日までに新しい有珠のスイミーに必要なもの、ネットで揃えられるか？ 制服フェチさん」

「……コクリツ…任せて……」

奏は無表情で、けれどもしつかり頷いた

徐々にピースが形作られていく

閉館時間までもう残り三十分だ、急がないと

「では、どこにいるか分からないハル君を助ける方法ですが」

「居場所が分からなくも、直接会うには、ゆりなら出来るよね？」

「え……と 私？」

いきなり振られてきよとんと驚いてしまった

「ゆりを中心に動いた、今までの経験と作戦を思い出してみ？」

その灯の言葉に頭がめぐり、一ヶ月の日々を辿る、そしてとっさにハツとする

あるじゃないか、街中に私だけの、一ヶ月の末に積み上げた私にしかないハルとの繋がりが

「そっかつ、携帯探せて安心サービス！」

「美弦のメールアドレス」

「おうっ、あたしらが知ったあいつのカルマだ、絶対ハルは弟の携帯を持ってくだろっ」

この一ヶ月動き回った事は確かに無駄なんかじゃなかった

私達は、幾つもの挫折の中でちゃんと成長していた

誰もが糸口が見えたと確信した

…そのときだった

「ダメですね」

おもむろに、呟いた少女

「ひより？、なんでだめなんだ？」

「それはですね、あれは前のは動かない物、つまり停車中の車だったから偶然可能だったんですよ」

「？どういう事？」

苦い表情でひよりは淡々と続けた

「本来民間のこのサービスはGPSの特定までに時間がかかり、数メートルとかなりの誤差が生じるものです

動いている対象物の正確な現在地を追跡する事に使うのは非常に困難です

それに恐らくハル君は駅前等、携帯の電波が強く正確に分かる位置にいない事は充分と考えられます

ビルや障害物などに反射してしまい…リスクが高過ぎます」

「…ほにゃあ、いいと思ったのです」

有珠がシャーペンを握ったままシユンと眉を垂らす

「……………ボクは……………諦めない……………」

（　　??　　）

ボツへ潰れかけた案を、そこで新しい能力が懸命に支えようとしていた

「奏??？」

「奏ちゃん?」

「……………夜の街なら、誰より隅々まで……………知ってる……………」

奏のトラウマだけだった日常が、時の経験となり甦る

今まで引きこもりの高校生が制服を着て徘徊していた、ひどく辛かった経験が、ここで主の今を支えるカルマの才能へと変化していく

「……………誤差くらい……………いりくんだ裏道くらい……………全部ボクが把握出来てる……………」

奏は強く言い放った、踏みとどまった

「奏アリガトさ、でもやっぱりこんなじゃ、会えても……………前の繰り返し、肝心の救う方法はないと思う

なんか、もっとでかくないと、どんでん返しがないとだめなんだと思う……………」

「……………」

「でも、必ず奏のその力を使うときが来るさよ 絶対だ」

「……うむ」

灯が冷静に語り、結局この案は振り出しに戻ってしまった

「ねえ、だったら、ここで使おうよ、みどり団」

内向きになる隙を与えず、今度は私が声を張り上げた

近づいてる、今一番勝つ方法へ近づいてるんだ

絶対にこの波を途切れさせない

「みどり団か、どう使つかさね、ハルを助ける為に」

ボールペンをくるっと回して、イスを後ろに引いて灯が難しい表情を作る

僅かな沈黙が流れ、それぞれノートを見る表情が陰しく曇る

（どう助けるか、どんでん返し…）

何か手はないのか、何か打つ手立てはないのか

逆境を打破する、可能性を呼び起こす何かだ

（何か……絶対にあるはずだ）

五分ほど経った

膠着状態に溺れかけたそこで、ついに難題を潜り抜けたのは

根暗少女だった

次の瞬間

「っ！　そういえば……！」

（ビク…ッ）

いきなり何かひらめいたように、解き放れたように、大きく大気を揺らしてまたもひよりが本をめくり出した

「ど、どうしたの??」

らしくない行動に、私達は食い入るように凝視してしまう

そしてその本は、ひよりの持ってきた、世界の革命が記された書物だった

「こ、これなら……！、みどり団を使うなら、みどり団じゃなきゃ出来ないと思うんですがッ」

僅かに眼鏡をずらして、ひよりは自身のノートにシャッシャと書きつづつて見せた

皆でそのノートを前屈みになって見つめる

「た、確かに実現したら使えそうだけど、凄いいけど……でも待って

ひより？ これに使う道具なんて明後日までに用意出来るの？」

見たそれはとてつもなく大規模できっとハルも救う事が出来て

けれども実現するには

…とても明日までには用意出来るはずがなかった

「……申し訳ありません、そこまで考えていませんでした

ゆりちゃんのおっしゃる通り、確かにこれは現実的に無理ですよね
…」

はあと気を落として、今まで一番期待出来た策も、ことごとくタイ
ムリミットの前に破れる

（…明後日までになんて…不可能なのかな…）

「いや」

そんなとき、全員が現実色に顔を俯ける中で

‘一人’だけが鋭い声で勝機へ照準を定めていた

伏せた顔を上げ、目に飛び込んできたのは

静まり返っていた隣のリーダーのが、凜とした声と射抜く視線だった

（あか…り？）

「灯ちゃん…？」

「不可能なんかじゃないよ、だってまだ一日もあるじゃんか
今までの経験、最低限のウィザード、有珠のギター」

傷ついた才能は再起し、身震いするほどの静寂をまとして小さな息
がしぶきを上げた

「で、でも灯？ もう明後日だよ？ さすがの私達でも……」

「あたしを誰だと思ってる？」

「…え」

わからない、力強くこちらを見つめた黒目が私の胸を震わせた
並々ならぬ気迫めいたものに鳥肌が立った

「ひより、あたしに任せてくれっ、出来る、これなら出来る、絶対
繋げてみせるッ」

ついに、策士の頭脳が覚醒する

（…何かひらめいたんだね、灯）

来た、やっと来た、恐れなく不敵な笑みを浮かべるこれだ

あのいつもの‘灯’だ

灯はいきなりヘッドホンをパチンと頭につけ、大音量のBUMPの
メロディをただ漏れに耳に被せた

頭脳と平行しているとは思えない速度でスラスラとページが埋まっ

ていく

一夜でハルを助ける手段、みどり団の役割

居場所の分からないハルを桐島さんから導く手段

新しい奏をキーマンに、そして、ウィザードとスイミーの新しい力を組み込ませていく

憂さなんてすっかり忘れて、目の前に広がるご馳走に興奮を隠せず、灯は腰を上げて異常なまでに感情を高ぶらせ、加速させた

「すみません、もう閉館時間なので そろそろ」

そのとき、チャイムの音と共に迷惑そうに職員女性の声を通った

「す、すいません、すぐに帰りますです、あと五分だけお願いします」

なんと、真っ先に声を出したのはあの人見知りの有珠だった

小さな身体でピシリと背筋を張って時間稼ぎに粘る

せつかく策士の案が一線に繋がったんだ、あと少しなんだ

「はあ、はあ……ッ！」

瞬きも忘れ、ペンを持つ右腕の小指側を擦って真っ黒にしながら

ガリガリザクザクとページが満たされ、幾つもの立ちはだかる壁をひっくり返していく

私達四人は、すぐに帰れるように山積みにした本を元にあった場所

へ戻していった

「ゆり、… ちょっといいか」

その際、研ぎ澄まされた眼差しはノートを捉えたまま、灯は小さく言った

「なに？」

「本棚から『精霊流し（しよりょうながし）』の記述が書かれた本持ってきてくれ」

そんな夏に使う物をどこで使うのか、それとも別に必要なのか

私には分からなかったけれど、とにかく灯が求めている物を走って取りに行った

いつもそうだった、私達じゃ到底思いつかない事を、灯は大胆かつ瞬発的に考えられる

そして、最後には勝たせてくれる

埃臭い奥の棚に行き、それらしき本を手に取り、たった一人残した勉強机に走って戻る

「これしかなかったけど」

「いや、充分さよ、ありがとう」

久しく誰も触れていなかったでだろう、時を経て茶色くくすんだ薄い本を私は灯に委ねた

すると、矢のような勢いでみるみる一世一代の大作戦が紡がれていった

……

そして、業を煮やして困り果てた職員が二度目の声をかけようとしたときだった

私達は、出会った

「はあ、はあ… 出来た…！ 出来たぞみんなッ！」

髪をぐしゃぐしゃにして、ありったけに右手を灰色に汚して

八時六分、私達の結晶、全てを飲み込む最後の勝利の方程式が完成した

「灯、最後の名前を教えて？」

「ワクワクするですっ」

「本当に、あれを明後日までに出来るのでしょうか」

「……………」

「行くぞ、これで最後にする、作戦名… 作戦名ッ！」

一歩踏み出すということは、踏み外すことと酷く似ていて

憂鬱に価値を失って、途中で逃げ出したくなって、いい加減閉じた
くなってしまう……

「作戦名…ッ！」

それでも心配ない、諦めなければ、負け続けても

例え接触さえ失った身体でも

例え生まれながらコンプレックスの差別に苦しみ続けても

例え肩身狭く引きこもりに成り下がっても

例え自分の才能が挫折の前に閉ざされても

例え、体温を無くして騎士の星さえ取り上げられても

諦めなければ、諦めなければ、諦めなければ

「作戦名えええッ！！」

そこには新しい何かが必ず待っている！！

「Rein：carnation」（リインカーネーション）
！！」

第13話

図書館の外に出ると、駅は祭りの後のような、余韻の空気に包まれていた

それは賑やかに橙色に騒いで、それでいてどこか寂しそうな冷たさもあった

まるで私達を待っていたかのように爽やかに全てを染め上げていた
「皆、本当にありがとうな」

軽くなった両手を広い夜空にうーんと目一杯伸ばして、大仕事をこなした後の解放感にも似て、灯はくしゃりと笑った

白い歯を見せて、間抜けっぱい跳ねた癖っ毛を揺らした

世間の物差しで見れば、そこにどれほどの意味があったのかは分からない

たかが薄っぺらいノート一冊にロスタイムまで使って必死になって
今どき流行らないスポ根みたいに汗を流して、端から見たらことん馬鹿馬鹿しくて

でもそれでも、私は清々しいまでに満足な疲労感と充実感を手にしていた

限界値を迎えた私達のリーダーのピンチを
今度は全員で紡いだ、その大事な大事な薄っぺらを築き上げられた

灯がこんな風にまた笑ってくれた事が
本当に来てよかったと、一緒になってほころんだ

「さて皆の衆、帰りますかー」

首筋を夜風に撫でられ、一区切りのあくびを噛んで

澄んだ八時の空の下、綺麗にポツリポツリと顔を覗かせる星を見上げて

幾分軽くなった足取りで五人はゆっくりと帰還していった

「なんだか今日はクタクタだよ」

「早くシャワーを浴びたいですね」

「おっ、だったらまたあの銭湯行こうぜー」

「昨日行ったあの銭湯??」

「いいですね、ゆっくりとお湯に浸かりたい気分です」

「いざ、れつつごーなのですっ」

「……こくり……」

そんなわけで、まだ今夜は終わりそうにない
日だまり喫茶店に帰るその前に

頑張った一日分の汗を落とす為、明日に備える為に

まるで本当の合宿のように、一行は銭湯に行く事になったのだった
ウィッチの現場兼停電が起きた大通りを過ぎ、車道を行き交うヘッ
ドライトを越え

街灯も少ない、そよ風に傾ぐ草と微かな鈴虫の音色だけが響く川沿
いの散歩道に行く

遠くに見える橋の上には、車や電柱の赤や白、たまに青色がまるで
ビーズように綺麗に向こう岸まで並んでちりばめられている

「つい最近、一気に日が落ちるのも早くなりましたね」

ひよりの声に有珠がにやあと相づちを打ち、触りたいのか、頭をな
びかせる猫じゃらしの群れに何度も視線を奪われていた

土手の草むらのほうでは、最後の夏の名残を味わうように、父とそ
の子どもが虫アミ片手に掻き分けている

私達の前には、Ｔシャツと短パン姿の男の人が家路へ歩いていた
手にはコンビニ袋をぶら下げて、耳にはイヤホンをはめて、暗闇に
気持ちよさそうに声のない発声で歌っていた

八時だというのに、小学生くらいの男の子二人組は茂るススキの草
むらで遊び

捨てたられたママチャリを見つけたと声を放つ
半分壊れたような錆びきったその鉄屑を、まるで探検家が宝物を見
つけたように夢中になってはしゃいでいた

（なんかいいなあ、こういうのって）

そんな穏やかな街の匂いについ笑みをこぼして
当たり前前の風景がたまらなく心地よく、そして幸せに感じた

てくてく聖蹟桜ヶ丘男子高校も通り過ぎ、横切り、密集した団地地
区を歩いていく

団地特有の薄い光が落ちていて、その周りを蛾が飛び回っている

薄暗い景色を少し歩いて、昨日に来た
随分と年季の入った‘和み湯’と深緑色ののれんがかけられた銭湯
に着いた

きっと自分達が生まれる前よりあったその中は、まさに古き良き雰
囲気を漂わせていて
お年寄りや一人暮らしの学生なんかを向かい入れる優しい空気に包
まれていた

銭湯なんて小学生以来に久しぶりに来たけれど、やっぱり何か大事
な風景がここにはある気がした

時代は移り、庶民の足は遠のき、それでも変わらず佇み続けるそこ
に少しだけ寂しさも感じた

木で出来た小さな下駄箱にローファアをしまつて、番台に座るおば

あちゃんにお金を渡し、ぎこちなく挨拶をする

「おや、また来たんだねえ」と、眠るように猫背だったおばあちゃんが丸い表情で会釈をする

「最近の子は可愛いねえ」と続けて気さくな笑みを向けられ、少しだけ照れ臭く、私は小声でありがとうございますと頷いた

女湯と書かれたのれんを五人は潜り、脱衣場に入る

時間的に、それとも普段からなのか、小さなそこに他の人の姿は見当たらなかった

……

「ゆりー？ 昨日は灯さんスランプ中で出来なかったけど もう復活さよ 安心しろ」

「いや、むしろそのおかげで安心出来ないから そんな凝視されても見るものないからね」

これまた木で出来たロッカーを開けて

ブラウスの第三ボタンに手をかけたまま、隣の視線に意識して動かす手を止めてしまう

恒例の如く、脱ぎかけた私の指先を灯がジーツと見つめていた

「ほにゃー ひよりおっきいのです！」

と思えば、いきなり有珠の聲が脱衣場全体に響き渡る

「??」

何かと思い奥に首を向けると

「いえいえ、普通ですよ」

普段はカーデiganの下に隠れている、高一とは思えない大人びたスタイルが映り込んだ

（やっぱりひよりって地味にスタイルいいんだね）

眼鏡も外し、艶やかな黒髪とも相俟っていつそう美人に見えて、つい見とれてしまった

「全然普通じゃないのです、最低でも有珠はそんな身体になったことないので　悔しいので今度身長と共にこっそりもらってしまおうですっ」

「ふふっ、それは困ってしまいました」

有珠はと言えば、見事に未発達のまま板だった

それでも、ひよりとはまた違った理由で見とれてしまうのだった

透き通るような真っ白い身体、柔らかな銀色の細い髪とビー玉みた
く大きな青い瞳

幼い表情と共に日本人離れた、まるで北欧の絵本からそのまま出てきたような一切の汚れのない純白の少女の姿

有珠は人とは違う身なりの特徴を全く気にせず、無邪気にひよりと戯れていた

ただ唯一、ひよりは誰とも直に触れないように気をつけていた

（それにしても、色んな意味でも同い年とは思えないね）

そんなことをまじまじと思っていると

「なははっ、ひよりと有珠が並ぶと酷だなっ」

「ちよっ！？、灯っ」

思っても決して言うてはいけない言葉を、灯はけらけら高笑いしながらズバツと言った

「ほにゃーっ、それはどういう意味ですかっ」

「なに、そのままの意味さ」

「むーっ」

有珠は頬つぺたをぶくーっとな膨らませて、ハムスターのように愛嬌のある丸顔を作った

どうやらこれでも怒っているらしい

「はははー、見るがいい このグラマーさんな灯の身体をつ」

調子図いた灯が脱衣場のど真ん中に立ち、大げさに制服をバツと脱ぎ捨ててドヤっポーズを決める

まあ、ただそんなわけでも

「普通…」

「普通ですね」

「普通にやうつ」

全員が声を揃えて、見たままにからつきし感情の入っていない感想を述べる

「がびごーんっ、やめてけろー それ！ 普通って言葉が一番灯さんグサツとくるからっ」

「じゃあ平均、または一般的」

「むーっ、そんなこと言っでないでゆりも早く脱げー！ ばか」

矛先が私に向いたかと思えば、いきなり後ろから抱きつき攻撃に徹してくる

「うわあっ、わかったから！、自分で脱ぐから！ だからセクハラやめてっ」

なんとか暴走した灯の魔の手から脱出して、照れながら結局一番最後になつて脱ぎ終わる

気がつけば、しみりと寂しげだった脱衣場からは外まで響く程の賑やかな声で溢れていた

「？ そっといえば奏ちゃんの姿はどこでしょうか??」

「あれ、そっいえば」

小さな脱衣場をぐるりと見渡しても、その夜色の少女はどこにも見当たらない

（もしかして…）

それぞれ身体にタオルを巻いて、浴場に行く扉を開けると

「……………じー」

大きな浴槽の真ん中にぼつんと、一人置物のように奏が無感情のジト目をこちらに向けて浸かっていた

「って！　なんで先に入ってんさよっ！」

まさかの灯のツツコミが炸裂する

「…………ボクの素肌を見ると…君たちが石になるんだ…これはボクなりのせめてもの気遣いだ、ありがたく思え…………」

意味不明の奏空間が間に流れ、四人とも半分開いた口と身体が一瞬固まる

「え、えーと、ぶつちゃけ簡単に言つと素肌を見られなくなかったと？」

「…ん…そう思いたければ…それでいい」

（なぜに！？なんで上から目線！？）

肩まで湯に沈んだ奏と、強盗との交渉現場並みに絶妙に距離の離れた扉とで、なんとも変な会話を交わした後

中に入ると、もったいないほど広いタイルの浴場も貸し切り状態だ

った

炭酸泉もサウナも水風呂もない

昔ながらの仕切りのない一つの四角い浴槽と数個のシャワーが付いていた

.....

その後、シャンプー中にいきなり灯に冷水をかけられて、仕返しをしたりして

避けた流れ玉が間違えてひよりの背中に直撃したりして

お詫びに髪を洗ってあげたり、横では有珠が鼻歌を歌っていたり

裸なんて気にせず、すっかり贅沢な遊び場になってしまった

灯の右手の油性の汚れも、埃の匂いも、集中した三時間分の疲労も

排水口に吸い込まれるお湯と共に綺麗さっぱり流れていった

.....

「はあ、気持ちいいね」

五人並んで、たっぷりの湯船にざぶりと浸かり
うつすら頬を紅潮させて、肌を寄せる

高い天井に顔を上げて、ふうと絶妙の湯加減に目を細める

「もう明後日ですね」

たちのぼる湯煙に落ち着いて、ひよりの声がタイルに反射した

「これから先、例えこんな風に全員が会えなくなつて、どんな困難が待ち構えてても、絶対有珠は最後まで頑張るのです」

年を重ねても、汚れ一つなくピカピカに磨かれた壁に視線を向け、誰もいない広い浴場に、全員がこの叶いかけた夢をやり遂げると誓った

「大丈夫さよ！、叶えられるさ この皆となら出来ない気がしない
きつと結末を覆せるッ」

すくつたお湯に前髪を濡らして、おでこを出した灯が期待に満ちたでっかい声を反響させた

「うん、そうだね」

そうだ、私達に出来ないわけがない
きつと待ち望んだエンディングが待っている

戦意を団結させて、何も恐れずに私達は眩しいほどの笑い声を上げた

それから少し、いい匂いのする湯船に顔を映して、肌になじむ感触にうっとりした

「ねえ、皆？」

思わず、ぼーっと天井を見つめて、心の奥から出た本音を湯気と一緒に浮かべた

「はい??」

「これが一息ついて、全てが終わったら」

「また一緒に、こうやって銭湯にも来たいね」

外に出ると、湯上がりの火照った肌にひんやりと心地よい風が吸い付いた

「ったく、結局奏の裸を見れなかったぜ こいつは魔法使いか」

「……うに…」

後ろでは灯が澄まし顔の奏を悔しげにいじっている

湯船から出て、制服を羽織り、下駄箱からローファーを取り出そうとしたときだった

「いつぶりか、本当に久しぶりに、あんな賑やかな声を聞いたねえ」

あ、と声を漏らして見ると、番台に静かに座るおばあちゃんが口を開いていた

「あの、ごめんなさい、こんなにうるさくしてしまって…」

迷惑だったと思い、私は瞬時に頭を下げた

すると、おばあちゃんからの返答は大きく違ったものだった

「お湯は、気持ちよかったかい？」

その表情はにっこりと、見たこともない優しさに包まれていた

「あ、はい、それはとっても、全然家のお風呂とは比べ物にならないくらいで」

「そうかい、それはよかった」

見ると、シワを蓄えた固そうな肌が嬉しそうに緩み、ただ少しだけ寂しそうに頷き

そして見守るように、こちらに向けられていた

「またいつでも、ゆっくり、入りに来なさい」おばあちゃんは最後にそう言って、イチゴ味の小さな飴を私の手のひらにぽとりと落としてくれた

古びた人気のない銭湯は、お風呂より遠くて、漫喫とは違って何もなくて

時代の流れにぽつんと取り残されて、いつかはこの街からも消える運命にあるのかもしれない

それでも、きっと変わらず胸を包む大事なものが、此处には残っている

和み湯ののれんを背に、また来ようと
夜中の団地の脇、まだ鼻に残る湯気の香りを吸い込んでみるのだった

第14話

銭湯からの帰り

お風呂上がりの身体に涼風を浴びて、私達は来た道とは正反対に団地をぐるりと回るようにして駅へ帰ることにした

車の走る音も人工色も少なく

頭上にはうるさいほどの星空が浮かび、瞳に押し寄せてくる

小さな公園を横切った辺り

少しすると、前方から香ばしい揚げ物の香りが漂ってきた

よく見れば、小さな惣菜屋さんから丁度揚げたてのコロッケがトレイの上にあげられるところだった

それはすっかり空いたお腹と唾液を刺激して、自然と私達は引き寄せられた

「おー、久しぶりにとんかつ食いたいなー」

屋台のように油の熱気が立ち込めるお店の前で、灯は隠すこともなく豪快にお腹を鳴らすのだった

「ねえゆり、今日の夜ご飯はとんかつじゃ　めー？」

「私は何でもいいよ、でも皆は？　奏とか」

正直なところ、灯のお腹の音に釣られて私も食べたくなくなってしまっていた

「ふふつ、私も揚げ物は久しぶりです　なんだか見ているだけでお腹が空いてしまいました」

「そのカニクリームコロッケも食べたいのですー」
有珠がショーケースの中を指差して無邪気にはしゃぐ

「……ボクも、いいよ……」

そんなわけで、寄り道をしたついでに私達は今夜の晩御飯をゲットした

サクサクのとんかつに、揚げたてカニクリームコロッケ、それから一口コロッケ

夏祭りの焼きそばを思い出すプラスチックの容器三つ分

灯が手に持ち、幸せそうに、一口コロッケをつまみ食いして頬張っていた

団地の自転車置き場では、部活終わりだろうか

制服を着た男子と女子が自転車をベンチ代わりに挟んでは、どこかこっそりと仲良く話していた

団地も過ぎ、徐々に見覚えのある景色に戻ってくる

……

辺りは一際しんと静まり返り、開けた一本道に差し掛かったときだった

後は帰るだけ、心地よくウトウトとした意識でそう思っていたのに

（……ッ！）

‘そいつ’は唐突に、隙について私のトラウマの記憶をえぐりに現れた

何の前触れもなく、容赦なく‘そいつ’はやってきたんだ

（……この道って）

何の変哲もない、ただの夜道だ

そしてそれは、一年前に死んだ私とハルがいた、現在奏の姉と桐島さんの母親が入院している桜ヶ丘中央病院へと続く道

そしてそれは、去年の夏、全てが始まった、轢き逃げ事件があったという殺害現場

そしてそれは、取調室で桐島さんから教えられた、ハルの住むアパートへ続く道路だった

（……ここは）

街をも巻き込む惨劇のカルマが眠る地

不意に足の感覚が鈍り、今まで皆無だった夜の不気味さが音を立てて身体中を包み込む

「お？ どしたゆりー？」

眠気など早々に消え、低体温者はバランスを失った世界に顔を伏せた
闇の中で二本の信号機が向かい合わせに佇むだけの、気味の悪い殺
風景な横断歩道

立ち止まった私に釣られて皆の動きも止まった

「にや？ゆり？」

すぐ前から不思議そうな有珠の声がしたけれど、今の私の耳に届く
ことはない

(……ゴクリッ)

夜の色に塗り潰され、ぽつんと人通りもなく、まるで連続通り魔犯
が生まれたままの無音の空気だ

ここで、どれほどの人の人生が狂ったのだろう

そう思うと、血が染み込んだ焦げ臭そうな路上は、年月が経った今
でさえ事件の匂いを生々しく残しているようで

押し潰された轢死体が転がっているように、現実味を帯びた面影が
無惨に置き去りにされていた

「……ゆり……ちゃん」

「そうか、ここが……そうなんだな」

「……こくつ」

足を止めた皆も、異様な閉塞感に支配された中心に立ち、ここに何が眠るのかを気がついたようだった

「なあ、ゆり、あれ」

「……??」

なんだろうと、おもむろに灯が指差した先、横断歩道向こうの信号機その下端に

「……あ」

不自然に小さな花束が、そっと供えられていた

黄色に点滅する冷たい路上を渡り、それに近づき、しゃがむ

見ると、萎れかけた花の中に一通の手紙が添えられていた

手のひらサイズの灰色の封筒に入った、まるで誰かに向けられたような形だった

「手紙、ですか」

「なんでこんな所にあるですか？」

「開けなよ、ゆり」

唾を飲み、躊躇した末に私は恐る恐るそれに手を伸ばした

中には白い手紙が一枚だけ入れられていた

……嫌な予感がした

手書きの文字に目を通すと、その予感のことごとく的中した

差出人は、桐島 逸希

そして、ハルへと向けられたものだった

つまり手紙の内容とは

10月1日、23時に警察署で待つという事だった

よく見ると、右下のにすでに誰かが触った指の形跡があった

（ハル……）

花束の経過具合からしても、私達の停学謹慎中にはすでにあつたものだ

着々と、この街は最後の対峙をする準備を整えている

「……ねえ、皆 願いがあるんだけど」

胸を締め付ける痛みを堪えて、今にも通り過ぎたい弱音を押し殺して、私は抵抗した

今、どうしても確認しておきたい場所があつた

全てを知った上で、最後の夜を迎える上で、逃げずに見ておかなけ

ればいけないと思ったんだ

「ハルの住んでるアパートを、見ておきたいんだ」

そうして、手紙を元に戻し、じめつく陰気に満ちた道を直進した
一歩進むたびに、足の裏はじんじんとして、埃を吸うように息苦しくなった

……

「秋日荘」

表にそう書かれた、築何十年も経っていきそうなアパートの前で五人は足を止めた

「ここだね」

外見はどんより黒とも茶色とも似つかない色に侵され、かなりの老朽化が進んでいた

「ゆり、本当に大丈夫か？」

「……うん、見るだけだから、それに多分、もうハルはここにはいない」

本当は、少しだけ後ろめたさに似た恐怖感もあった

二階建て、全部合わせて部屋は六つだった

一階の部屋のどの名札にも該当する苗字はなく

赤茶に錆びきった骨組みの階段に、出来るだけ足音を鳴らさないようにして私達は上っていった

「ここじゃないでしょうか？」

202号室、その名札には、はっきりと紺野と書かれて立てかけられていた

（……ここで、ハルと美弦は暮らしてたんだ）

電気はついていない、生活感もない

ドアノブをひねってみると、しっかりと鍵がかけられていた

中を見なくても、人のいる形跡などすっかりなく、もののけの空なのが見て分かった

（ねえハル…貴方は今 どこにいるの？）

主に捨てられたようにひっそりと佇むそこは、今では人が笑って住んでいたとは思えないほどさびれていた

全てが薄汚れて、家として完全に死んでしまっていたのだ

ハルはここで、一年もの間、家族のいなくなった暗い部屋で想いも吐き出せず、每晚壊れた涙を滲ませて泣いていたはずだ

帰る家がこんなに成り果てて、どれほど辛く、そして痛々しい時間だったか

最後には苦肉にも、ウィッチとして、少年はこの部屋から刃物を持つて駅へ行つたのだ

その瞬間、こんな朽ちたハルの深いカルマを目の当たりにして本当に一夜なんかで助けられるのか、不安が募ってしまった

実はもうずっと前から手遅れなんじゃないだろうか

私達がしようとしている事は、所詮は学校の道徳で習ったようなセオリー的幻想的解決法で

今更そんなものが、居場所も分からないハルに届くのだろうか？

「……………」

脆そうな扉の前、ポケットに忍ばせていた携帯を開いて美弦のアドレスを見つめる

「…ねえ灯、私達の存在ってなんなんだろう、これからやろうとしている事は、ちゃんとこの人に届くのかな？」

不意に出た消え入るような声は、悲しみに沈んで扉にぶつかる私は後ろに立つ灯に顔を向けずに聞いた

問われた灯は一度大きく息を吸い、私にためらう隙も与えず響かせた

「あたし達がしようとしている方法が正解なのか間違いののか、そんな事は結果が出るまで誰にも分からないし」

「あたしらの存在は所詮、大きなお世話の邪魔者で、ひどくリスクがある無茶で自虐的な行為をしてるに過ぎないのかもしれない」

灯はどこか冷ややかに、そして客観的に閉ざした

「でもね」

その時、灯が声質を強くして逆らうように切り返した

「ただ唯一、このずっと続くどうしようもない街のカルマを変える事が出来る『縁』を持っているとすれば、それは間違いなくゆりお前だけなんだぞ」

「ッ！」

真っ直ぐな視線をかざして、灯は大気を揺らした

「人を助けようと決意したときに、手遅れなんて、正解も不正解もないんさよ？、あたし達がずっと今までそうだったじゃん」

「…うん」

「大事なものは、がむしゃらでもなんでも、最後には助けたいってかざし続けることだろ？ あの花火みたいにさ」

「…うん、そうだね、そうだったね」

「だったら、明後日やるしかないだろ？ 明後日、叫ぶしかないだろ？」

嬉しかった、曇りかけた心が自信で湧いた

「ふふっ、ゆりちゃん、忘れたんですか？ 私達は『sellin

g d a y、ですよ？」

「にやう、このままじゃ消化不良で終われないのです、この街を全力で巻き込んで、もう一度救いに行くのです。そしてライブに行くのです」

「一度負けた…ボク達なら、いつでも君の為に死ねる覚悟は出来るよ」

彼女達の声はいつにも増して揺るぎなく、私の胸に訴えかけた

「ありがとう 皆」

褪せる事を知らない戦友の強い瞳に支えられ、私はハルの住んでいたアパートを後にした

直面した大きすぎる傷痕に生じた一瞬の不安など、尚も大志を抱き続ける仲間の声によって綺麗に吹き消された

あの花火大会の日

散り散りの絶望のふちで私は変わった、誰一人として諦めずに変われた

でもハルだけは……例外でね、残念ですが変わらないんです

そんなふざけた定理があるもんか

弟の死も自殺もウィッチだって、一年前に閉ざされた世界だって、人生終わりにきつたどん底の位置にいたって

絶対変わるんだ！！

海が枯れないといけない、空を飛ばないといけない

もしそんな状況になろうとも、例え何万年離れた場所にしようとも私達はどんな手段を探しても貴方を救いに行くだろう

私は明後日、貴方を助ける為に、この皆とあらゆる全てをかけてこの街でもう一度戦う

一人の男の子が死んだ道路の上に踏みとどまり、限りなく広がる空を突き抜けるほどストレートに視界に捉えて

今にもこぼれ落ちそうな星達に野望をたっぷり染み込ませて

風の先に立ち、私は強く強く決意した

- 日だまり喫茶店 -

いろは坂を上り、若い草の茂る暗闇のトンネルを抜ける

帰ってくると、私達の隠れ家の店先に何かがなびいているのが見えた
眉をひそめて近づいていくと

「なんだ…これ」

「『ガリレオ衛星』??」

ほっこりする揚げ物の余熱の香りを打ち消して
木目扉に、夢を覚ますように一枚の紙がバチンと貼り付けられていた

新たな第三勢力が、そこには待ち構えていた

(…なんだよ、なんなんだよ今度は)

重大な隠し事が親に見つかったときのような、冷や汗と緊張で言葉を失う

威嚇するようにサインペンの太文字で書かれたそれに目をやると

もう後戻りなど出来ない自分達の立場が浮き彫りになった

『君たちが当日何をしようとしているのかは分からないが、私達は君たちが準備している全てを知っている』

君たちが今からしようとしている事は無駄な努力だ、自滅行為だ

万に一つとして成功する可能性はない』

(なに…これ)

『せっかく手に入れた日常を棒に振らないほうがいい』

今ならまだ間に合う、何も失わずに家族にも迷惑をかけずに引き返せる

『もうやめなさい』

私達に君たちを捕まえる事は出来ないが、これは我々大人からの警告だ。

ガリレオ衛星 』

(……警告)

私達の企てた行動は全部見つかった

追いかける強大な影が、たった五人の私達の前に最後の選択というエサを持って立ちはだかる

後悔に迷わす言葉を巧みに並べて、分岐点へ立たせて苦しめる

「みどり団が…見つかったということですね きっとユーザーの中にもスパイが」

ひよりが顔を曇らせて指を口に当てて考え込む仕草を見せる

「誰なのですが ガリレオ衛星って」

怯えるように顔を強ばらせて、有珠に言った

「ガリレオ衛星、つまりはガリレオ・ガリレイが見つけた木星の近くを回る‘四つ’の衛星の天体的名称ですね」

「四つて事は、いや、そうじゃなくともこんな事が出来るのは、桐島逸希達を含む加害者の四人だろうな」

「どうするの灯？、みどり団も見つかって、ここにいる事だって筒抜けで」

「 だから？ 」

（ え…… ）

動じることなく、灯は得意気に笑ってみせた

「 ……だ、だから、これからやることは全部見破られてるかもしれないんだよ？ 」

私がそう言つと

その瞬間、灯は貼り付けられた紙をとつさにぐしゃりと掴み

そして、反抗心に身を任せて一気に派手な音を撒き散らして破りさつてみせた

「 お前らに敷かれたレールなんかへし折つてやるよッ！ 」

「 ツ！ 」

灯は侵食された領土に立ち、なりふり構わず明日へ向いて腹の底から声を張り上げて叫んでみせた

「 こつちにだって譲れないモノがあるんだッ、人生かけちまうほど死にかけてる男の子が目の前にいんだッ 」

いいさよ、別に今さら隠さない、知恵くらべだ！、どっちが明日を変えるか最前線で真っ向勝負してやるッ 」

そして、 selling day（みどり団）、ウィッチ、ガリレ

才衛星

全てのリスクかけた新たな挑戦の門出に立ち、開け放たれた星空の下
断固として警告の二文字を逆らって私達は一日を終えた

明日は、ついに最後の準備期間だ

それぞれの信念と正義を武器に、個々に求める結末を掴む為に

矛盾を抱えたまま、最後の三つ巴の戦いがすぐそこに迫っていた

第15話

- 同時刻 - 聖蹟桜ヶ丘某所 -

.....

あの日から、私達の時計の針は進んでなどいない

夜のコンビニに行く事もためらわずにはいられない、一秒が重く粘り
それまでの原型を留めず…私の日常は寂しさに滲んだ

忘れ物をしている感覚は拭えず、抜け殻のようなスカスカな空白感
も消えず

あの日以来、朝へとともに繋がらない生活が続く

けれども人の脳というものは、それすらも一年続くと順応しようと
徐々に慣れ始める

私の名前は 中島 京と言う、三十になる男、独身

そして、人殺しの親友を持つ共犯者だ

.....

日没を過ぎ、ブラックコーヒーとタバコを相棒に、誰もいない社内で
残業のデスクワークに勤しむ

昼間とは一変したビル内一角に佇むそこは、現在蛍光灯は私の頭上
以外はほとんどが消されている

しんみりと侘しささえ感じられる冷たい空間だが、私にはこの孤独感が居心地良くも感じられる

何かをしているといい、それだけで気が紛れる

書類の山を処理して、深い息を吐いてネクタイを緩める

眼鏡を外し、充血した目頭を指でぐっと押し、すっかり固まった背骨を鳴らして立ち上がる

（みどり団…か）

昨日、久しぶりに三人で屋上で集まった後、仕事の合間を縫って私はみどり団について調べた

高校生に成りすまして登録をした、言うところのスパイという行為を行ったわけだが

パソコンから一通のメールを送ると、案の定、何の疑いも持たないリーダーと名乗る‘みどり’という者から正午過ぎに返信が届いたのだった

康介の言う通り、その内容は十月一日に集まれないか、という安易で単純なものだった

私達が疾うに失った、疑いなど持たない真っ直ぐな言葉達

失敗など恐れない、それすら考える事も忘れる、空だって飛べる若さの勢いで満ち溢れていた

「…ふう」

カチリカチリと、クリックの音が薄明かりに響く
視線を上下にサイト内を散策してみると、一物の不安は現実味を帯
びた形となっていた

（やはり、君達なのか）

全く、康介の警戒した通りだ
変化を求める高校生の集まりの中、出来すぎなくらいにシナリオの
つじつまが合ってしまう

しかし何度破れば気が済むというのだ、こんな夢のような子供だ
ましの策なのだぞ？
こんなものに全てを賭けて、この街を本気で救えるとでも思ってい
るのだろうか？

君達を、一体何がそこまで突き動かしているのだ

（それでも、真剣に茶茶を入れる気にいるというのなら、我々とし
てもやむを得ない）

不在の逸希に言う事は出来ない
それでなくとも、あいつにこれ以上の余計な負担はかけられない

申し訳ないが、私達三人にも譲れない都合がある、君達の思惑を阻
止させてもらう

（君達の為だ、動いた事に今に後悔する、端から泥沼に呈したこの
街を救える可能性など、方法など最初からないのだから…）

パソコンの電源を切り、帰り支度を整えて私は退社した

向かう場所は一つだった

彼女達がいるとするならば、恐らくはあそこだろう

……

以前、目的をほのめかさず、フラットに日向が逸希からその場所を
尋ねていた

‘日だまり喫茶店’

駅の先にある、いろは坂の上、黒々とした闇の中にその場所は隠さ
れるようにポツリと存在していた

まさに隠れ家にはふさわしい場所のようだった

そして、ガリレオ衛星の名を名乗り、私は警告の二文字を若者に突
きつけた

‘ガリレオ衛星’

十五年前になる、夏夜の屋上で、初めて四人で掲げた天体望遠鏡で
見た天体の名前だった

瞳の奥に直接染み込むほどの感動だった

望遠鏡を担いで駆け上った階段、金網を潜り抜けて見上げた夜空、
夏の夜の香り、手を伸ばして掴みたいと夢中になって見入った星

今も鮮明に覚えている、私の人生の中で一番楽しく、生き生きと毎

日を充実していた時期があそこだった

（もう…無邪気なあの頃には戻れないんだな）

そしてため息交じりに、眉に渋い縦ジワを寄せて、私はその喫茶店の扉に張りつけた

まるで差し押さえの張り紙でも付けられたような無惨な見てくれだった

敵に憎いような感情は一つもなかった

逸希と似たように、巻き込んでしまった事に対する申し訳なさや後ろめたい自己嫌悪の気持ちでいっぱいだった

まだ幼い高校生の彼女達には、やはり普通の日常に戻ってほしかった

結局は自分のせいだ、逃げ続けてきた業だ

だから、素直にもうこれ以上犠牲者を出したくなかったのだ

（だがこれで、少しは自分達の置かれた立場が分かるだろう）

君達は戻るんだ

でも、本当に、彼女達がこの程度で諦めるだろうか？

全てを終える短期決戦の夜は、もうすぐそこに摺り足を鳴らして待機していた

（……帰るか）

濃い草の香り、久しぶりに見上げた夜空は瑞々しく澄んでいて
心地よい夜風が青春を捧げたその古き空へ視界をいざなった

毎日、今は彼女達が主役になってこの空の恩の下で夢を握りしめて
活躍していると思うと

少しだけ、胸の隅っこ辺りがジンとした気になった

次、またこの空が見れるときが来るならば

私は…、私達は…、ガリレオ衛星は…

……どこにあるのだろう

意味もなく手を伸ばして、無音の星明かりが降り注ぐ帰路を、背広
を着た三十の大人は去っていった

第16話

- 9月30日 - (火) - 3日目

聖蹟桜ヶ丘女子高校

放課後、赤みを帯びた西明かりが、賑やかな生徒達の横顔を遠く染め上げる

六限目の数学の抜き打ちテストの疲労に唸りながら、灯と肩を並べて廊下を歩いてゆく

乾いた街は、少しずつ色調を変えて夜を迎えようとしている

selling dayが再結成してから早三日、ついにタイムリミットの最終準備期間だ

思う存分溜め込んだアイデアと能力を武器を手に
唯一の‘縁’を結ぶ為、私達は大作戦に必要な道具を揃えに駅前へ繰り出す約束をしていた

調達、細工、仕込み、下調べ、偵察

失敗の許されない解放劇を起こす為、私達は危険な戦場へ赴く
「にしてもクラス違つと こういう時めんどくせよーな」

放課後すぐの校舎というのは意味もなく動きが多い
学業からの一時の解放に、私でさえ茜色の傾く校舎の中で羽を伸ばしたくなる

廊下にはそんな生徒で溢れている

友達と話しながら掃除をする生徒、カバンを持って生徒玄関や部活へ向かう生徒

はたまた帰りの予定に花を咲かせる生徒なんかでこった返している

「教室に行けば済む話でしょ」

そして私達は、まさにそのどれにもカテゴリーされていない反社会的ジャンルに属する

だらだらと進み、先にひよりのいる教室に向かう

掃除中だったひよりを外から茶化して回収し、校舎を反対側に歩いていく

有珠と奏のクラスはまだホームルームが終わっておらず、中から先生の声がしていた

三人で廊下側の壁に背を当てて待つ

しばらくして中からイスの引く音が一齐に響き

「お待たせしましたのですー」

カバンを手に、続々と出てくる生徒の間から有珠と奏が小走りになつてトテトテ寄ってくる

全メンバーが揃い、いざ、ようやく下校

そう思った矢先だった

ふと、さっきまで中にいた先生が、なぜか私達に歩み寄ってきたのだった

「あー、お前ら　ちょっと待て」

無駄に細長い顔と長身からゴボウに似て、あだ名が何とも単純にゴボさんと呼ばれる、小田という先生だった

「えっと、なんですか？」

生徒からは親しみのあるお父さんのな先生だったから、私はつい油断していた

すでに私達は、一度のペナルティを食らっていた事を……

「あー、お前ら、また性懲りもなく裏でこそそやってないだろうな？」

「や、やってないに決まってるでないかいっ！　こんなにいい子に育った生徒達を疑うとはっ、ゴボさん見損なったださー！」

その瞬間、コツリと灯の頭にチョップが振り下ろされる

「馬鹿、すでにお前らは前科あるだろうが　というかお前はまず髪の色だ」

冗談半分に言い、ゴボさんは続けた

正直、私はズキリとした、今まで経験上、本能的に何かの罰が来るのを悟った

「いやなあ、あれだ、なんというか昨日、学校のパソコンに変なメールがきたんだよ」

だから渋々と、とばかりにゴボウに似た頭を掻く

「メール…でしょうか？」

「お前らがまた裏で何か問題を起こすような事をしている、なんというか密告みたいな内容だったんだよな」

（…っ！）

頭に電流が走る

…やられた

先手を打ってそんなことが出来る者がいるとするならば

「確か送り主は、あーと…うん、あれだ、ガリレオ衛星、とか言うのだったぞ？ お前ら心当たりはあるか？」

「ッ！ な、ないですッ」

その刹那、頭に巡った言葉とゴボさんの声がリンクし、思わず反射的に不自然な声を張り上げてしまう

気がつけば、私はまるでむきになって自分が嘘をついていないと言わんばかりの反応をとってしまっていた

「？なんか怪しいなあ？ まあこんなでも一応俺も教師だからなあ、

一回形だけ取らなきゃいかん、今から職員室に來い お前らへのメ
ールだしな」

……まずい

ここで捕まるわけにはいかない

捕まれば、……死ぬ

刻々と逃げ道が塞がれていく時間の中で、立ち尽くし私達は考える
平静を装いながら、息を殺してどうにか手探りで逃げる術を考える

探せ

逃げ道を探すんだ！

そしてコンマ数秒、緊張したピンチを真っ先に救ったのは、有珠だ
った

「先生っ！」

ビシッと手をあげて、無駄に大きなモーションをとった

「うお？なんだいきなり？」

歩き出そうとしていたゴボさんが驚いた様子で振り返る

（有珠？どうする気？）

一定のための後、有珠は能力を解放した

「実は…有珠達、これからどうしても行かないといけない所があるのです」

…ゴクリッ

「うん？ 行かないといけない所ってなんだ？」

息を呑み、神に祈るような思いで周りのメンバーも有珠の打ち出した助け船に意識を集中する

「中央病院に、これからお見舞いに行かないといけないのです…
待っている友達がいるのです」

その瞬間、今までの寸足らずな少女は消え
それはそれは相手の同情を誘う悲劇的声質に変わる

「なんだどうした？ 知り合いが事故でも遭ったのか？」

「…ぐすんっ、実は…ゴクリッ」

思い出しただけでも悲しみの涙が溢れてしまっ、もちろん嘘だ

周囲は完全に有珠のペースに引き込まれる

瞳はうつすら腫れて、今にも端から滴り落ちそうな涙をじわりと溜めている

すべて、嘘だ

「…行ってくて、有珠約束したの…ッ」

「も、申し訳ありません、面会時間が今から行くとギリギリになっ

てしまうんです」

すかさずひよりも波長を合わせて加勢する

「お…おお、悪い、そいつは行つてやるべきだ」

不意を突く幼い泣き顔に、なんともぬるい返事が帰ってくる

周囲を通過する生徒達の白い目を浴びながら

たまらずゴボさんは小さな肩に手を添えて慰めた

思いつきり困惑した顔だ

水面下の駆け引きが続き、そして

「うーん、まあいいか、それに比べたらこんなのは大事なことじゃない うん、そうだ」

「…すみません…」

内容だけではベタ過ぎるそれさえも

有珠のスイミーを駆使すれば、疑う隙さえ与えず、まんまと人のいい返事へ誘導させる事が出来た

ゴボさんは有珠の無垢な性格から、まさか嘘をついているという考えも思いつかないといった感じだった

難を逃れ、私達は失礼しますと一礼をしてそそくさとその場を去った
途端に緊張の糸が切れ、ふうと階段へ逃げ込もうとした

そのとき

「あー、お前ら！」

（…ビクッ！）

不意に足が静止する、遠くからゴボさんの追及の声がつんざいた

（ウソ、まさか有珠の演技がバレたの…？）

ダメなのか、なんでこんなところで……

その声に背が跳ね、一旦引いた緊迫感が音を立てて蘇る

周囲の温度がガクンと下がり、途端にメンバーの顔がぶり返して青ざめていく

自分でさえ顔が強張っていくのがわかった

そして、ゴボさんはゆっくりと迫り、言った

「あれだ、お見舞いに行くなら確か駅前のスタバの近くにある小さな花屋がオススメだぞ」

「…は？？」

思わず、身構えていた全員が揃ってきょとんとアホ面を浮かべる

予想していた言葉はなく、なんとも気の抜けた言葉だけが返ってきたのだった

三秒後、なんだよと全員の肩から力が抜け、安堵の息を漏らした

そして、今度こそ階段を下って、危機一髪私達はその場から脱出したのだった

.....

「いやーっ ヒヤヒヤしたさよ、ゴボさんがお人好しで良かったのらー、にしても有珠の演技はホント神がかってんな おかげで助かったぜ」

「.....猫かぶり.....」

「久しぶりに本当に私ももうだめかと思ってしまいました」

「エへへ、有珠は嘘だけは上手ですからー」

有珠は嬉しそうに笑い、薄影の伸びる生徒玄関でローファーに履き替える

（それにしても...）

全てを裏返そうと企む正義は、本当に私達のすぐ側まで迫っている

徐々に、けれども確実に自分たちの身の回りを蝕んでいる

（家は、大丈夫かなあ）

校舎から離れ、グラウンドから真っ直ぐ正門を抜ける
五人は現在地に立ち、改めてそっと校舎に振り返った

陽が傾き、辺りがしんと静かになる

馴染み深い学校を見つめて、灯は言った

「まあ、残念さけど…もうこれで明日学校には行けないな」

「そうですね、部室どころか学校にも行くことが出来なくなってますね
「まいりましたね」

「……代償……」

「また、最下位になっちゃったのです…」

目の前に佇む四階建ての校舎の大きさと比例して、私達がどれだけ脆くて小さな存在かを思い知る

此处で、本当に色々な経験をした

青くて近い夏空の下、全てが始まった出発点

皆と出会って、汗まみれに廊下を走り回って、水道でがぶ飲みして
夏夜の屋上に侵入してみたり、段ボールを運び出して部活を作ったり、
非常階段で風に当たったり

一時はぶつかって傷つけ合ったりもした

秘密を打ち明けて、幾度と無くここから先に進んできた

いつももの恩や思い出のエピソードが詰まった大事な聖地

…でもそれは、もう無い

私達は、この瞬間をもって

完全に日常へ帰る帰路を……失った

大きすぎる犠牲に、ぽっかりと沈黙が仲間達に流れる

嫌な空虚感が加速し足元を覆う

それに耐えきれず、払拭するように、らしくもなく私は目一杯強く
呟いた

「勝てばいい」

大口に気取って、眼を見開き、一端に秋空に掲げた

「ゆり…ちゃん？」

「明日絶対に勝とう、このまま終わりになんて出来ないよ」

うんと背伸びをして、私は揺るぎなく言いきった

皆は戸惑い、そしてゆっくりと瞬きをして、吹っ切れたように単純
な笑みをこぼした

「フツ、やっと主人公らしくなってきたな そうだな、勝てばいい
んだ」

呆れるようにニヤけた口元で、衝動が空を飛び越える

「ふふ、相変わらず変わりませんね私達は、何も変わりません 今

も勝利を目指して進んでいます」

「……うに……世界はボク達を中心に回ってる……」

「にやう、見事勝ち誇って、そして帰ってくるのですっ、もう一度、五人でここへ、」

灯、ひより、奏、有珠、ゆり

そして、私達はまた歩み始める

「さあ、行こうぜっ、世界を変える前夜祭だ、」

踏ん切りをつけ、五人の傷持ち少女は前を向いた

ほんの少しだけ心残りを滲ませて、五人は聖蹟桜ヶ丘女子高校に胸を張って別れを告げた

ここが私達の望んだ戦線だ

だつてさ、知ってる？

マイナスにだつてさ、縦一本増やしたらこんなに簡単にプラスにだつてなるもんだ

そう考えたら案外単純にワクワクしないかい？

だからね、今、あえて私達は絶望と手を繋いでこう言おうと思うんだ

さよなら、日常

やあ、おはよう、ピンチ、

第17話

歪んだ正義が飛び交う裏世界を、灯と私は託された

最終決戦を明日に控えた夕暮れ

大きな緊迫感と使命感を背負い、私達は手始めに灯の家からパンク修理を終えた自転車を引っ張り出してきた

壊れるまで乗りつぶした、あの懐かしいママチャリだ

いつもの二人乗りで、いつもの並木道のトンネルを走り抜ける

灯は前傾姿勢を保ったまま、ヒビ入りのペダルをフル回転にかざして通行人を追い越していった

向かうは最後の戦場だ

身構えた肌に、初夏にも似た快適なスピードが涼しい風を当てる

久しぶりの活躍にか、待ってましたとばかりに自転車も荷台に乗ったお尻に振動を伝えた

そして十メートル先、五メートル、二、一、

颯爽とゲートを潜り、炭色にそびえ立つ支配者達の城がその顔を出す

見渡す限り只の駅前、一見広くて平和で、学校終わりの生徒がたむろする慣れ親しい場所

そしてそこは、ごく一部の人間を巻き込んだ、どす黒い秘密を持つこの街の抗争地帯

花火大会の日、私達が必死になって走り回った凱旋の舞台が、数奇にも最後の舞台だ

スクランブル交差点に飛び出しし眺めれば、街はすっかり学校終わりの制服達が社会人に混じって群れていた

ネクタイは緩み、ワイシャツは裾は飛び出し、ちゃっかり家路を抜け出した高校生達が楽しげに顔をオレンジに染めている

そして、ふと考える

果たしてこの中で、明日、街で戦争が起るとは一体誰が予想しているのだろうか？

と同時に、リア充はびこる溢れんばかりのエネルギーの中、ポツリポツリと携帯をいじる姿を見かけると

ああ、この群れの中にもみどり団の落ちこぼれや省かれ者のメンバー達が独りぼちでいるのかもしれない

冴えない表情で息を潜め、しかしネット内の水面下ではとんでもない変化を待つ弱者達

なんて、そんな勢力を想像して、密かに沸々と心が高鳴った

今日も変わらず京王線の電車は新宿からサラリーマンを乗せて帰ってくる

何ら変わらない、いつものお疲れムードの茜色に染まった聖蹟桜ヶ丘駅だ

そんな一角に二人はウィルスの如く忍び、駅の改札口へ続く長いエスカレーターを上っていく

意味もなく振り向くと、首筋にうつすら夕焼け色をした風がかすめ同じようにして、前に立つ栗色の髪がふわりと後ろを向いた

「うにー、結構買いつくすものあんなー」

そう言う彼女の手には一冊のノートが握られている

翌日に控えても、未だにメンバーは作戦内容をおおざっぱにしか聞かされていない

だからもちろん道具も知らない

けれどもそれはずっと前からの事で、灯らしい癖だ最後に全員の気持ちを爆発的に団結させる、煽って引き締めさせる、これはそのシチュを作る手段みたいなものだ

灯の作戦を信じているからこそ私達は完全に身を委ねられる、だから何も口出しもしない

そして現在、学校を後にした私達は二手に分かれていた

駅前で調達をする組、つまりは私と灯

喫茶店本部で作業をする組、つまりはひよりと有珠と奏

ひよりはウィザードを一から作り直し、有珠はまた新しいみどり団のリーダーからのメールを返信する作業

奏は制服フェチの知恵を生かし、灯から言われた特殊な道具達を翌日配達が可能なネットショップから発注する仕事を担っていた

更に奏にはもう一つ、灯から街の隅々を知る能力に頼み事をされていた

それにはなぜか、私の‘携帯’を貸してほしいと要求された

意味なんて分からなかった、理由も聞かなかった

それでも私は信頼した、私は奏を、灯を信じて、現代っ子の命の次に大切なそのアイテムを勝つ為に預けたのだった

そうして、まさに全員が身を挺して一丸となり

負ければ退学の十字架を背負い、たった一つっきりの秀でた一芸を駆使して計画を紡ぎ合わせていた

.....

「ねえ、どこに行くの？」

「うーん、色々と寄るところはあるけど、まずはあそこかぬあー」

「あそこって??」

首を傾げて尋ねると、灯はどこかニヤリともったいぶって言った

「にししっ、映画館にー、デイズニーストアにー、あ、灯様銀だこ食いたいな」

「いやいや、どこに行く気なのっ、というかこれはデートかっ」

「ふげシっ！」

おでこをパチンと軽く叩くと、灯は驚いて目を閉じた

「うう…灯さんの冗談さよ」

「それで、今からどこに行くの？」

すると灯はまたも得意げに時間をもて余して私の好奇心をギリギリまでくすぶらせたりして

「楽器屋！」

とびつきり嬉しそうに、意外な言葉を放った

「楽器屋？なんで？」

「勝利の鍵を握る『最終兵器』を手に入れる為さよ」

「???」

やけにカッコつけて、灯は指の関節をポキポキと鳴らした

そうして、今では懐かしい、私とハルが初めて出会ったエスカレーターを大きな歩幅で越える

灯を先頭に、趣旨も知らされぬまま、イベント前日の買い出しにも似た気持ちで駅構内の楽器屋を目指した

「えっと、五階だね」

階段脇に取り付けられたプラスチック製のフロア案内板を指差す

丁度帰宅時間のピーク、大きな駅ビルの中はさながらクリスマス並みの人の活気で賑わっていた

そんな人ごみも今日ばかりは気分は悪くなくて

ふと見ると、桜ヶ丘男子校の制服を着た二人組がギターとベースのケースを背負ってじゅれ合っていた

向かう目的地はきつと私達と同じ場所で、その歩みには何か真っ直ぐなオーラに満ちていた

それに釣られてか、明るすぎる店内の白色の蛍光も起爆剤となり、自然と靴下に収まった私の両足もウズウズした

（エスカレーターはどこだろう？）

フロアマップを見返そう

と思った矢先

「待ちきれねー！ ゆりーっ、どっちが早い競争だじえー！」

「ちよちよっと灯待ってっ、え、ていうか階段から行くのッ!？」

目をくしゃつとさせて、有り余るハイテンションでパタパタと先走り、灯は階段を駆け上り始めていた

私の静止など意味もなく、結果として最後まで私も汗だくで五階ま

で走りきり

「だあ……はあ、はあ　死ぬ……」

「だ、だから最初からエレベーターで行けば良かったのに」

気がつけば、二人して膝に両手をつけて無駄な疲労感に息を荒くへばっていた

「…もう、なんで階段でなんて言ったんさよー」

（えー……　私　一言も言ってない）

終始そんな灯のペースに振り回されながら、私達は思わず顔を見合
つて頬を緩ませた

学生らしい事とか全部放り出して、ただ二人で走った、その単純す
ぎる感じがひさすらに気持ちよかった

それは気恥ずかしさもあり、こそばゆい嬉しさもあり、不思議と懐
かしい気持ちをかよわせた

そして終わってみれば、これは灯なりのさりげない優しさだったの
かもしれないと、そうも思った

表面には見せない学校を失った私の不安をすくい、額に汗まで浮か
べて、間接的に埋めようと努めてくれていたのかもしれない

なんとなく、普段からの灯の姿勢もあつてそんな事を思った

そして、私達は勝算を握る楽器屋の前にたどり着いた

見渡すと、ワンフロアを贅沢に使った店内は目移りしてしまう輝きを放っていた

綺麗に壁に立てかけられた新品のギターはどれも曇りなく光を反射し、色とりどりの形を揃えている

種類ごとに細かく仕切られた棚には、アーティスト使用と書かれたピックからお手頃チューナー、何から何までお客を喜ばす色を蓄えていた

「おー やっぱしここに来ると興奮する」

見ると、先程見た制服二人組がスコアの並んだ棚から楽譜を手にとっていた

つい、口元が緩んだ

「私は楽器やらないけど、なんだかここは好きかも」

皆が生き生きしている雰囲気空間から滲み出ている気がする

奥に設備された防音スタジオから響くバンドの生演奏や

店員さんがお客さん相手にアンプを通じて鳴らすギターの電子音、大きく立派なドラムセットもだ

指先で触れただけでドキドキしそうで
初めて味わったくさんの世界が小さな高校生の胸を一杯に覆いつく
した

なんだか、それだけで本当に明日を変える気分になった

そうして、ついに本題に取りかかる

「この中で何が必要なんだっけ？」

「えっと、有珠から頼まれたのは」

と言って、灯はノートのページをペラペラめくる

しばらくした後

「おっ、これさねっ」

壁際の棚に行き、タバコサイズ程の小さな箱形がびっしり並んだ中
から一つを指差した

「アコースティック・シュミレーター??」

レトロ感の漂う、一見おもちゃにも見える可愛い機械だった

アンプから流れるギターのサウンドを変える‘エフェクター’とい
うもの

「つか金足りるかなあ」

「皆からあんなに貰ってきたのに？」

すると、灯は全員から預かった貯金と手持ち分が入った茶封筒を力バンから出した

つい先程、学校前のコンビニの事

メンバー全員、ATMの前でおしくらまんじゅうになって画面を操作した

お年玉やお小遣いを貯めた貯金、それら全てをたった明日一日分だけの為に全額はたいしたのだ

茶封筒の中には高校生四人が託した重い重いお札の束が詰まっている

「大事に預かったんさ、無駄にはしない、でもぶっちゃけ…周辺機器は高いんさよ」

そして、エフェクターをまず確保して次に進む

「次はこいつさね」

目の前には、多種多様なボーカルマイクが陳列されている

その中から灯が手に取ったのは

「へえ、そんなマイクもあるんだ」

超小型軽量とポップが付けられた、白色の「ヘッドバンドマイクロホン」

前に立てかける一般的なマイクとは違い、よくオペレーターやジャーナリストのライブで付けているようなやつだった

細い棒状の本体を両耳にかけて固定し、小さなマイクの先端が丁度

口元にくる形をしている

コンパクトで激しい動きにも対応できそうだ

「うわ、てか 高っ！」

そして値段も大変高価に仕上がっていた

他にも、そのすぐ近くのオーディオ小型ミキサーも一緒に購入した
CD程の平べったい大きさ、銀色のフレームにつまみが四つ付いている

灯に聞いたところ、普通はギターアンプとマイク専用のボーカルアンプを使うのだけれど

これはその両方を調節して一つのアンプから出す事を可能にする大変便利な装置らしい

ギターとアンプだけあればバンドが出来ると思っていた私には、それは全く複雑で未知のもので、ただただ感心してしまった

「それにしても本当に色んな物があるんだね」

「ギターはそれだけ奥が深いんさよ」

ふむふむと頷いていると、次なるアイテムがやってきた

「今度はなに？」

「じゃんつ、USBインターフェイスです」

「いんたーふえーす??」

謎の言葉に片言になる

「うーむ、説明が面倒さけど、簡単に言うとアレかな、パソコンを使ってアンプをスピーカーの役割として音楽を流したいときに使うもんさね　まあ他にも使えるけど」

「それは普通に繋がらないものなの？」

私はひよりほどパソコンにも、灯ほどギターにも詳しくない人間なので、ついケーブル一本と根性でなんとかすると思えてしまう

でも現実には、そう単純ではないらしい

「えつとな、パソコンに付いてる差し込み口のUSB端子と、ギターに使うアンプのLINE端子がまず全然別物だから、それを繋ぐ役割を持つてるのが、このUSBインターフェイスなんさよ　ゆり君お分かり？」

「なんとなくで分かりました」

こくりと、少し砕けた表情で頷いた

選んだ品々を一回レジで会計を済ませる

高校生が然も当然と出した一万円札束に、店員も驚いた様子だった

会計を済ませる間

なんだか今買ったモノ一つ一つ、果たして二十数時間後にはどんな魔力を宿して活躍しているのか

最後を飾る随一の武器の分だけ、想像しただけでもグツと込めた拳に指先が熱色に染まった

そして最後に、灯はこの戦いで一番大事な機材を探しに夜を進めた

第18話

「先日は、どもー」

お店のエプロンを着用したアルバイトらしき店員さんを見つけて、灯はすかさず声をかけた

一言二言話し、バイトさんがスコアブックを棚に補充し終わるのを待ち、そのままアンプのコーナーへ足を運ばせていく

「…灯、知り合い？」

初対面ではないらしい反応に耳元で小声で聞くと

「おうっ、先週助けていただいた紳士さんさよー」

わざわざ小声で聞いた問いに、灯はなんとも灯らしく大きな声で答えた

そうこうしているうちにアンプのコーナーに着く

そこは店内の四分の一ほど、かなりのスペースを使っていた

見渡す限り、ところ狭しとライブで使うような巨大なアンプ、小さなミニアンプが積まれて身を寄せあっている

「持ち運び可能なエレキアンプで、アコギにも対応してる、迫力のある大きな音が出るアンプだとどれがいいっすかー？」

「そうですね、そうなりますと　ここら辺にあるのなら大体は対応していると思いますよ　後はお客様の希望する音量とパワー次第で

すかね
」

そう言うのと、大学生くらいの店員は丁寧に話しながらいくつかのアンプをひょいっと引っ張り出してみせた

適当にギターを持ってきて、近くのパイプ椅子に腰かける

すると、こなれた手つきで先程出したアンプをギターとケーブルで繋ぎ、ポリウムダイヤルを回した

次の瞬間、ジャツジャ！と大きく歪んだ力強い電子色が鼓膜を震わせた

予想していたよりもずっと大きな生の迫力に、思わずビクリと背筋が跳ねる

「うーん サイズはこれくらいがベストなんですけどねー、ポリウムが足りないかもっす
」

と言って、一般的電子レンジ、またはブラウン管テレビサイズの黒いアンプに灯は却下の意向を示した

（あんなに大きかったのに、この音じゃだめなんだ）

素人の私からすれば十分すぎるくらいな轟音だったのに、灯にしてみればしっかりこなかったらしい

次、また次と、三十分ほど大小様々なアンプ達が鳴らした末に、指揮官は却下と保留を溜め込んだ

これぞというものに出会えないまま、ついに店員さんが該当する全

てのランプを鳴らし終えたのだ

それでも灯は唸り、どうもしっくりくるのがないといった様子だった

「ねえ、それは？」

それに見かねて、何気なく私が指差した物

悩むリーダーの足元近くに偶然目に入った、置物みたいなランプだった

値札には、マジックペンで書かれた割引価格を斜線で大きく消した跡があつて

まさかのそれでも売れなかったのか、また更にその下に半額以下にされた見切り価格がでかかと書かれていた

（うわ、汚…）

ズリッと引きずり出してよく見れば、それは欠陥品なのか、光を浴びた黒色の四角いボディは想像を裏切る灰色の薄埃を被っていて

……ちよつと後悔した

「お客様、それですか…」

「あ、えつと??」

指差すそれに目を逸らして誤魔化すと、店員さんは困った顔でクセのある代物だとぼやいた

「正直、店側から言うのもアレなんですが、オススメは出来ません

ね
」

最初に鳴らしたブラウン管テレビサイズ
形だけなら、始めに灯の出した条件

・運び可能な手頃なサイズ
というのだけはばっちりクリアしていた

しかし店員さんの説明では、抜群の爆音と破壊力を兼ね備えた一方
柔らかく柔軟な音が苦手なため、周りの楽器を掻き乱してしまう

単体の弾き語りでもなければとても使えないと、そう説明された

見た目の予想通り、まさにアンプの中ではいわく付きの問題児だった

なんだか哀れみにも似た、私達に似たものを感じた

（厳しい灯判定ならこれは弾かなくても却下かなあ
）

そう思ったときだった

「あたしに弾かせて下さい
」

（え？
）

驚いた、意外だった

灯は唐突に言い、そして今日自ら初めてギターを握った

パイプ椅子に座り、出来損ないのアンプにケーブルを差した

（？、なんで、なんでわざわざ売れ残りのアンプなんか？）

さては店員さんの話を聞いてなかったのか

はてなマークいっぱい私のをよそに、灯はボリウムダイヤルをほんの少しだけ上げる

すると、アンプはたちまちジーツと大きなノイズを立てた

いつでもいいぞ

まるで今にも音を出したいとばかりに、残念判定を覆したいとばかりに言っている気がした

次の瞬間、それに答えるように、白色のピックがピンと張った六本の弦めがけて豪快にスイングする！

俺は不良品じゃねえッ！

埃が払われ、落ちこぼれが火を吹く！

ギャイイインツッ！！

「ツ！？」

今まで押し殺していた分ありったけを躍動感ゴリゴリに叫んだ

周囲の空気は瞬く間にして吸い寄せられる

「び、びつくりした…」

第一声に、終わってもまだ耳元にわんわんと反響して残っている

「そうなんですよ、サイズと音だけはいいいんですが、今みたいに荒いと言いますか、繊細な音が本当に出しづらいアンプなんですよましてやアコギには…」

「やっぱりそうですか」

「はい、なので、やっぱり最初選んだこっちのほうが…」

「…いや」

説明をする店員さんの声を切り、灯は一人真剣な眼差しで呟いた

「あかり??」

ギターのネックを握ったまま、ただじつと誰にも買われないその売れ残りアンプを見つめて

「そうか、お前もなのか…」

「お前も『落ちこぼれ』なのか」

そして、続けてリーダーは勧誘するように細々と漏らした

「どうする?、一緒に行くか?」

「え…、でもほらこれ、あんまり良くないらしいよ? 私にはよくわからないけど」

トントン拍子で勝手に進む灯に、店員も横であっけらかんとしている
大袈裟に手なんか振って私も先程店員が使った言葉を繰り返した
「アコギ？だっけ、には向いてないらしいよ？」

多分、私なりに最低これよりは性能が良い物はあると思ったから

一般的冷静な意見に言ってみた

でも、灯は違っていた

「ゆり 知ってる？、ギターの感動ってさ、上手い下手でもなくて、
不思議なことに楽器の性能でも、ましてやテクニクでもないんだ
」

（?? なんの話??）

「えっと、じゃあ…なんなの？」
きよとんとすると、灯は次で全ての疑問をねじ伏せた

「『化学反応』 弾き手の伝えたい感情が乗った声、そこでそいつ
を叫んでくれるアンプ」

（……化学反応）

「あたしは、それはこいつだと思うんだ こんな爆音しか鳴らせな
い取り柄一つの落ちこぼれが、きつと鳴らしたかった音が、あたし
達の求める感動とピッタリ相性が合ってると思うんさよ」

その言葉に、不意に首筋にゾクリと爽やかな鳥肌が立った

「有珠には、有珠の鳴らす無茶なギターをフォローしきれんのは、こいつの音だ そんな気がする」

常識に囚われる事なく、灯はにかつと笑って言いきった

「こいつも同じ、今が最後のチャンスなんだと思う、だからこいつには、その一瞬にしか出せないガツて爆発的な勢いが備わってる」

「ゆりはさ、そんな気しない？」

淀みなく真っ直ぐに、彼女は瞳を輝かせて発した

キラッキラに眩しかった

その若い言葉と空気に触れて、また胸の奥でドキドキが押し寄せてる自分がいた

(……………)

なんでだろう、今までの自分達の経験からかな

説得力のある灯の説明に、確証のない自分たちの世界がこんなにもすんなり開けた気がしたんだ

大事な何かが、この古びたアンプには宿っている

そんな気がして、だからさ、無意識に私は気がつけば言っていた

「そうかもね、なんだろう、私もそんな気がするよ」

少しだけ空気を多く吸って、頷いていた

落ちこぼれ同士、たった一人を救う為だけにがむしゃらに音をかき鳴らす姿が

不思議なほどしっくり、目を閉じると鮮明に描けてしまったのだ

.....

最後まで店員さんは「本当にこれでいいんですか？」と繰り返しか
角も欠けて埃も被ったそれだけでは申し訳ないと思ったのだろうか
購入するぎりぎり、親切にアンプ用ソフトケースまでセットにして
付けてくれた

一見すると旅先に持っていく小さめのキャリーバックにも見えるそ
れは

下に小さなキャスターが四つ付き、引いて持っていく為のキャリー
ハンドル付きだ

側面には普通にカバンみたく持つ為の太い手持ち紐も付いている
無理をすれば背負ったりも出来そうだった

「あつ！ 忘れてたさ！」

「え？ まだ何かあるの？」

お会計を済ませる間際、灯はハツとしてそのまま慌てて足音を鳴ら
して何かを取りにいった

後ろのお客さんが睨みを向けて、いかにも苛立っている

「す、すいませんっ これも追加で！」

帰ってきたその手に握られていたのは、見覚えのあるものだった

（これって…）

よく覚えている、いつかアマリリスを入れた、あの改造前のソフト
ギターケースだった

そうして、手荷物いっぱい、私達は楽器屋を後にした

「ところでこのアンプ どこに持っていくの？ 日だまり喫茶？」

「いや」

そうして灯は目一杯右腕を高く掲げ、全身を使って指差した

「、」の上を、」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5708v/>

まぐろ剣士 -Rein:carnation-

2011年11月17日18時38分発行